

バイオハザード・改～恨みの利用～

Naveruzu

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2016年7月15日、瑞穂市にある瑞穂警察署に勤める男性・武田 清継は、staff隊長の本条 信治達と共に、猟奇殺人事件が後を経たないと言う大門市にある赤嶺研究所に向かう。それが武田 清継にとつて、波乱万丈な人生劇の始まりだと言う事は知るよしも無かった…。

※これは、バイオハザードの恨みの利用のりメイク版です！嫌だなあと思う人はブラウザバックをお勧めします！一応、細かな内容や台詞等を変えてるつもりです！

目次

第一章―生物災害と研究施設

第一話く調査と意味く	1
第二話く衝撃と体力く	8
第三話く提案と拒否く	15
第四話く認証と疑い	23
第五話く報告と作戦く	30
第六話く情報と推測く	38
第七話く聴取と証言く	46
第八話く潜入と異変く	54
第九話く発言と市街く	62
第十話く真実と予告く	70
第二章―深刻化と捜査中	
第十一話く組織と発生く	78

第一章―生物災害と研究施設

第一話〈調査と意味〉

2016年7月15日 10:00

〓七道山公園付近〓

武田『ああく疲れた。久し振りの休日だ、何しようかな。』

俺の名は武田 清継。瑞穂市にある七道山公園のベンチに座っていた。瑞穂市について簡単に紹介するとバイオハザードから逃げ込んできた東京23区出身の難民達が西多摩に移住し、長らえていた。そこに根付いた為か西多摩は大きく成長した。その中の一つである瑞穂町が人口40000人を超えて市制。町から市に成った未だ新しい自治体である。

武田『しつかしこの街も随分と変わったな。昔とじゃ比べもんならんよ。』

そう言つてリラックスしていると白い半袖着て、ブルーーツースを耳に付けている黒いサングラスをかけた男が俺のもとに来た。

？『よう。元気にしてるか？』

武田『おう、相変わらず健在だよ。』

俺のもとに来た男は俺よりも五つ年上で瑞穂警察にあるstarfの隊長：本条 信治である。瑞穂警察とは、簡単に言えば西多摩に散らばった警官たちを雇う所だ。そしてstarfとは、隊長の本条信治が立ち上げた平和を守る特殊部隊だ（因みに由来はかつて存在していたラクーンシティの市警に有った精鋭部隊の“S. T. A. R. S.”からとったもの）。

武田『それよりどうしたんだ隊長。何か有ったのか？』

本条『ああ、実は署長から急遽調査を頼まれてなあ。』

武田『成る程。で、その調査とは？』

本条『うむ、それは大門市の赤嶺地区で猟奇殺人事件が起きたんだ。』

武田『え？マジですか？』

そう、例え安全でも完全にゾンビが居ない訳ではない。一人噛まれりや伝染病の様に広がっていく。だから市に成長した瑞穂市は警察署を建て我が市からゾンビ隠滅を行っている。その中で活躍したのが隊長率いるstarfだった。

武田『ですが、私達の領域では有りませんか？大丈夫なのか？』

実は、瑞穂市の警察署（以降瑞穂警察署と呼ぼう）の管轄は我が市は勿論、福生市や羽村市、武蔵村山市や東大和市であり、青梅市から分離独立した大門市は管轄領域ではないのだ。そうしたなかで隊長は言う。

本条『勿論大丈夫だ。大門市の市長からは了承もらってるし、課長もOKしてたから大丈夫だ。』

武田『そ、そうか。なら良いんだけど…。』

本条『まあ、アンブレラが残したただのゾンビだ。臆することは無いぞよ。』

武田『あ、ああ。』

本条『ではまた現地で合おう。何より私は忙しいのでね。』

武田『ああ、分かった。他の隊員にも伝えとくぜ。』

本条『うむ、頼むぞ。』

そう言うとき隊長はその場をあとにし、俺も約15分後にその場を離れた。

2016年7月15日 13:55

〜赤嶺研究所敷地〜

武田『隊長、全員揃いました。』

本条『うむ、では向かうぞ。』

隊員一同《了解！》

時刻はPM 1:55。季節は夏。セミが鳴く頃に、本条率いるs

tarf: ZECTteamは赤嶺研究所敷地に潜入して調査が開始された。だが、入って約30分後に悲劇が起きた。

下野『隊長！俺、アレ出そうです！』

本条『イダーサ・リー、言葉を謹め。そんな状況じゃないぞ。ちやんとしろ。』

奴は俺の三番目に強い新入隊員の下野 豊。細かいことが大の苦手である。あ、因みに隊長はアダ名を付けるのが好き。俺の場合はゴハン・レッドフィールドと呼ばれる（あの「クリストファー・レッドフィールド」に似てるからなのか知らないが…）。

下野『スママセン。しかし今日が初めてなので凄く緊張してて…今日は一回も御手洗いに行ってないんです。』

本条『馬鹿かお前は…分かった良いぞ。あそこにちゃんと御手洗いの場があるから速く行って来い。他の者はここで待機する。』

下野『あ、ありがとうございます！では行ってきます！』

そう言うのとつさに御手洗いに向かった。そんな下野を見ていた仲間一人が口を開いた。

？『困った人だぜ。馬鹿にも程があるぜ！なあ武田。』

武田『そうだな、久松。』

彼は久松 悟朗。好奇心旺盛な彼はいつも色んな事に挑戦し、色々な賞を取っている。

本条『その間に他の者の確認をする。』

因みにstarfはZECTteamとBOARDteamの二つのチームがあり、その中でも最高の実績を持つのがZECTteamだ。このチームの人数は10人で、この時着いてきたのが5人。隊長と俺、久松と下野、後藤である。色々している内に数十分が経過していた。

後藤『隊長、下野の奴遅いですね。見に行きましょうか？』

本条『ああ、頼むぞタンバリン・サーシャ。どんな状態か伝えてくれ。』

後藤『了解しました隊長。』

久松『下野は大丈夫だろうか。アイツ臆病者だから。』

武田『大丈夫だろう。下野はさ。馬鹿は死なないって言うだろう？』
俺はそう言うのと木に寄り掛かって寝た。だって公園で昼寝しよう
かと思った所に隊長が来て急遽の調査の参加を要請したんだもん。

武田『久松、下野と後藤が来たら起こして。俺は寝るから…』

後藤『うぎやああああ！』

俺が久松に話し掛けた時、突然叫び声が聞こえた。大きな声だった
為、流石に目が覚めた。

久松『い、いきなり何なんだよ！叫び声がしてよ。』

久松がぶつくさ言っていると草むらの中から何者かがゆつくりと
現れた。

武田『な、何だ？』

その何者かをよく見ると肌の色が紫色に変色した下野の姿だった。

久松『お、おい！どうしたんだよ下野！おい！』

下野『ヴウウ…』

武田『駄目だ。奴は下野じゃない！』

俺達が声をかけても反応しなかった下野に対して混乱し始める。
すると、それに気付いた隊長が銃を取り出して近付いてきた。

本条『そこをどけ、私に任せろ！そいつはゾンビだ！』

そう言つて隊長は下野ゾンビの頭部目掛けて銃を発砲した。撃た
れた下野ゾンビは倒れた。

久松『そんな…下野。何故なんだ？』

俺と久松はそう悲しんでいるなか、隊長が何やら気配を察すると、
突然隊長が声をあげる。

本条『おい皆！この場を離れるぞ！速く！』

俺達は隊長の声で気付き顔をあげる。すると回りには他のゾンビ
で溢れていた。

久松『ヤベエじゃんこれ。何体いんだよ！』

武田『死ぬんじやね？俺達。』

ざっと数えて約30体は居るであろうゾンビに俺達は絶望して立
ち尽くしていた。だってこんな聞いてないよ？

本条『速く逃げろ！死にたいのか！この実態を抜けるんだ！』

久松『そ、そうだよな。』

武田『こんなところで固まってちゃいけない。早く逃げるぞ！久松！』

久松『おう！』

俺達は隊長の叫びで正気を取り戻し、必ず生きて帰ると誓うと、ゾンビと交戦しながらその場を離れた。しかし、長いこと交戦してもゾンビは減らなかった。

武田『チツ！な、何体いんだよ！』

久松『全くキリがないぜ！』

本条『耐えろ！じやなきやあ生きて帰れねえぞ！』

俺達は逃げながら銃を発砲するが、それでもゾンビの数は減らない。俺は銃弾が残り少ないことに気付く。

武田『隊長！もう銃弾がありません！』

本条『何?!仕方ない、退避だ！逃げろ！』

二人一同《はいっ！隊長！》

隊長の命令で俺達は後ろを振り返らずに突っ走った。しばらくすると奥から研究所らしき物が見えてきた。

武田『た、隊長！あ、あの中に入りましょう！』

本条『そうだな。一応調査対照だったし、危険な状態だ。皆、研究所内に入れ！速く！』

ゾンビの多い数に追われながらだともう限界に近いため、俺達は研究所内に入ったのだった。

2016年7月15日 14:57

↓研究所内↓

ヒュー、ガタンツ！

久松『ハアハア：何なんだアイツら。とてつもない数だった。』

武田『皆大丈夫か？』

本条『大丈夫だゴハン・レッドフィールドよ。それより、カカロツ

ト・バートンは何処も噛まれていないか?』

久松『ハアハア：はい、大丈夫ですよ隊長。何処も噛まれていません。』

武田『隊長、これからどうします?』

すると研究所の入り口に大量のゾンビが来ていた。

ゴンゴンゴン：

本条『うむ、ゴハン・レッドフィールドは研究所の調査を任せる。私とカカロット・バートンはここをできるだけ確保する。』

武田『了解。出来るだけの情報を得てきます。』

俺がそう言って身の前に存在していた階段を登りだした。すると久松が俺を呼び止める。

久松『おい、武田。』

武田『ん? 何だ?』

久松『死ぬんじゃないぞ、我がライバルよ。』

武田『ああ。そっちもな。』

そう言う俺は階段を登った。その後は2階に居るゾンビを一掃しながら怪しい研究室見付け次第、中に入って調べていった。

2016年7月15日 15:42

↳ 研究所内―第三研究室↳

武田『ここかな? ここに関する資料が有るのは。』

俺はしばらくしてこの研究室を見付けたので入って調査していた。

武田『何としても証拠を掴まないと。怪しいのはこの机か?』

注意深く各机や棚を回って資料を探していた。すると、あるレポートを発見した。

武田『これが怪しいな。どれどれ：』

俺が見つけた資料にはこんなことが書いてあった。

― 人体研究結果報告書 ―

私達研究員はあるボスからの命令で――ウイルスの進化版を造る

こととなった。私達は大門市民を誘拐し、改良型t—ウィルスを投与して研究を行った。ボスからの目標として次の3つを要求された。一つは知性温存。二つは体力増幅。最後に運動神経増大だった。私達はその三つの目標を成功に掲げ、何百人との犠牲を出した。今はt—ウィルスlevel135まで完成し、その能力も今までのゾンビと比較して良い結果と成った。だがいつまでこの監禁された場所で研究を続けなきゃいけないんだ…ではこれにて報告は終わる。

武田『何と！ゾンビがいつまでも減らないのはこの研究のせいだったのか！』

俺は驚きながらその報告書を入手し、他の資料が無いか探しに行動を起こした時。

ダン！ダダダン！

突如、研究所に銃声が鳴り響いたのだ。

武田『何だ？今の音。』

気になった俺は銃声のした場所へ向かうため、第三研究室をあとにした。そして1階へ戻るとそこには……………隊長達の姿がなかったのだ。

武田『な、何故だ？』

第二話く衝撃と体力く

2016年7月15日 16:00

く赤嶺研究所―出入口付近く

武田『隊長く！久松く！いったい何処へ消えたんだ？』

俺の名は武田 清継。約数分前に銃声が聞こえたので、出入口の方に行くと言隊長達が居なくなっていた。その為、今は外に出て隊長達を捜している。

武田『急に居なくなるっておかしいよな。何故急に消えたんだ？』俺がそうぶつくさ言って本条達を捜していると、何かのロゴが描かれている紙を見付けた。俺はそれを拾い上げ、よくその紙を見ている。すると、ある「企業」のロゴだと言うのが分かった。

武田『これは…ミズホ・アンブレラ…。』

ミズホ・アンブレラ社とは2008年に五十嵐を代表取締役社長に創設された巨大製薬会社で、主に瑞穂市を拠点としている。かつてのアンブレラ社やトライセル社と言った世界的有名な企業のように名を馳せる会社である。

武田『な、何故ここにミズホ・アンブレラ社のロゴが有るんだ？まさかこの関係が？…もし、そうだとしたら此処は罠なのか？…もしかすると、隊長達は目的のために捕らえられて…。し、信じられない。』

俺は半信半疑では有るが、衝撃的な情報を知ってしまった様に思えた。俺はしばらくその場で立ち尽くして考えるが、謎が謎を呼ぶだけなので考えを止める事にした。

武田『こうしては居られない。もしそうだとしても、まだそんなに時間が経って無い訳だし、捕まったわけでもないかもしれないから。取り敢えず捜すか。』

俺はそう思い、銃を手にしてまた隊長達を探しに赤嶺研究所敷地内を散策し始めたのである。

2016年7月15日 18:00

～赤嶺研究所～北側～

武田『ハア…隊長達は本当に何処へ行つたんだ？全然見つからないぞ。』

あれから更に俺は、約2時間近くも隊長達を見落とすのしないように捜していたが、その遺品すら見つからないでいた。

武田『…段々暗くなってきたな。ここは危険だから、早く見付けないと死ぬことに成るかもな。』

俺はそう言いながら別の場所へ移動しようとした。その時だった。身の前に約30体以上のゾンビと遭遇してしまったのだ。

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『チツ！まったくウザい連中だ！大人しく死にやがれえ！もう見飽きたんだよ屍！』

ババババンツ！

ゾンビ『ヴツヴツヴ…』

武田『…つたく、銃弾が足りねえのにアイツらはあく！！マジで消えろよ死体!!』

ゾンビとある程度交戦して倒したあと、また散策を再開する。でも、なかなか隊長達の遺品すら本当に見付からない。

武田『いい加減に出てきてくれ隊長！久松！お願いだ…』

そうやって願う俺だが、そう簡単に叶うはずもない。するとまたあの憎たらしいゾンビの大群に遭遇してしまった。

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『チツ！まったく腹が立つぜ！隊長達は見つからないし、ゾンビに追いかけて回されるし、もう一刻も速く隊長達を見つけてここから出たい。』

俺は残り少ない銃弾を搭載した銃を持って奮戦する。だが、なかなかゾンビの数が減らない。

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『チッ！』

バンツ！バンツ！

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『つたくもうつ！いい加減にしろよ化け物！大人しく墓場で寝てりや良いだろ死体ども！』

そう言つてゾンビとの対処に夢中に成る。しかし、それが凶と出たせいか、木の根を全く気付かずに躓いてしまい、その場に倒れた。そしていよいよあの憎たらしいゾンビの大群に囲まれてしまった。

ゾンビ『ヴウウ…』

ゾロゾロ…

武田『ち、ちつくしょう！俺の人生はここで終わってしまうのか！無念。』

俺は自分の人生が終わろうとしている事に絶望した。そして、死を覚悟したその時だった、何と無く手を伸ばした際に何かが手に触れたのだ。

カチャ…

武田『ん？何だ？』

不思議と思つて触れた先に顔を向けてみると、そこには対B・O・W・兵器が落ちてあったのだ。

武田『こ、これは！仮面ライダーシステムじゃないか?!』

名称は「仮面ライダーシステム」と言う機械だ。簡単に説明すると、旧アンブレラ社が残した「負の遺産」を消すためにミズホ・アンブレラ社名古屋支部が開発した身体能力増幅装置だ（因みに、名前の由来は、その兵器が「仮面ライダー」に似ていたため）。もう何百人の人々や組織等がこれを導入してゾンビ征討に取り組入られている代物だ。

武田『な、何故有るんだ？まさか、ミズホ・アンブレラ社と関係がある事を示しているのか？』

俺は何故あるのかで疑うが、今の状況で考える時間が無いと判断し、変身することにした。

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『覚悟しろよ？ テメエら！ 変身!!』

スチャ…

ベルト《レッツ討伐！ 今こそ立ち上がれ戦士よ！》

そう言っつてベルトを腰に装着した。するとベルトが音声を鳴らし、みるみるうちに鎧が身体につけられていった。

ゾンビ『ヴウウ…』

武田『これで終わりだ！ 化け物ども!! オリヤあー!!』

遂に仮面ライダーへの変身が完了した俺はそう言いながら、ゾンビに向かって走り、パンチを繰り返した。

武田『オラオラオラオラあー!!』

ゾンビ『ヴツヴツヴツヴウウ…』

武田『俺を散々苦しめた罰だ！ 大人しく地獄へ逝きやがれ！ オラオラオラオラオラあ!!』

ゾンビ『ヴツヴツヴツヴウウ…』

武田『これでおしまいだ!! せいぜい天界に逝って暮らしやがれクズども!!』

そう言うとゾンビとの距離をとり、必殺体制へ入って足にpowerを溜め始めた。随分と早い気がするが、今の俺は早くゾンビとおさらばしたかったので、特に気にしなかった。

ベルト音声《powerfullcharge!》

武田『よし、溜め完了！ もう出てくんよ化け物ども！ さらばだ！』
ベルト音声《highspeedkick!》

足にpowerを限界にまで溜め終わった後、ゾンビに向かって近づき、強力な素早い蹴りをお見舞いした。俺の周りにいたゾンビはその攻撃を受けて大爆発を起こして全滅した。

武田『ハア…終わった…』

俺が言ったことで鎧が自動で消えるとドタンツ！と木に寄っ掛かった。

武田『ハアハア…さ、流石に…た、体力の消費が…ハア…早かったか…ハア…で、でも……やつと…倒した…良かった…。』

俺はいきなり仮面ライダーに成って後悔したが、一方で強くなったことを実感して喜んでくれたのだ。だが、喜べない部分も有った。

武田『ハア…でも結局、隊長達を見付けられなかった。何故だ？本当にあの企業に連れ去られたのか？』

俺はそう疑問に思うなか、何か後ろでササツという物音が聞こえた。それを不思議に思っけて声をかけたみた。

武田『誰だ！またゾンビなのか？』

そう言いながら振り返ると、何と黒服の姿が居たのだ。

武田『あいつ……！おい、待て！待ちやがれ!!』

俺は残り少ない体力で逃げ去ろうとする黒服の後を追うが、途中で見失ってしまった。

武田『あ、アイツがいたということは、この研究所の黒幕という可能性が高い。ならミズホ・アンブレラ社は関係無いかもな…。』

俺はこの事件の黒幕がミズホ・アンブレラ社ではなく黒服と確信した。

武田『しかし、証拠が何も手に入らないとは……悔しい。』

そう言うのと立ち止まって悔やんでいたところ、さっきの声を聞き付けて別のゾンビの大軍がやって来た。数はざっと20体ぐらいかな。

武田『チツ！全くうじゃうじゃと出てくるウザい奴らだ！しかし、さっきの戦いで疲れた。早く逃げるとするか…。クツ！』

俺は急いで別の場所へ向かうが、先程の戦いで身体中が疲れきっており、動くと身体が悲鳴をあげる。思うように動かない身体のせいで、また足を木につつかえて躓いてしまった。するとゾンビ達は瞬間に俺の所へ追いついてきた。

武田『チツ！俺は本当にもう駄目かもしれん。この生活悪くはなかったよ。さらばだ!』

逃げる体力を無くし、逃げる気力も無くした俺はそう死を覚悟した。その時だった。

ババババン！

ゾンビ『ヴウ、ヴウ、ヴウ。』

武田『?』

急にゾンビ達が死んだのだ。発砲された場所に目を向けるとそこには、ミズホ・アンブレラ社が持つ特殊部隊が救援にやって来て居たのだ。

? 『こちら smartelevenf 隊長。応答せよ。』

? 『どうしました?ゴクア・フィッシャー隊長。』

? 『独りの生存者発見した。至急こちらに向かえ。』

? 『了解。』

武田『お前らは誰だ。』

smartelevenf と名乗る団体の一員である人に通信を終えた後、何者が問いかけた。

? 『私達はミズホ・アンブレラの特殊部隊：smartelevenf の者だ。そして私の名は橋田 英則と言う。もう安心だ、直ぐに治療をしてやるからな。』

武田『…おう…ありがと…。』

そう聞いた俺は安心したのか、急に意識が遠く成って倒れた。

橋田『おい!大丈夫か!おい!大変だ!他の隊員よ!速く生存者の治療をしろ!死んでしまうぞ!』

? 『了解!』

|
|
|
|
|
|
2016年7月24日 13:00

福生市の病院

看護婦『しばらくは安静にしてくださいね。』

武田『ああ分かってる。』

俺はどうやら助かったみたいだ。約2週の間、意識が無かったらしいが、今は大丈夫。左腕には点滴がしてある。

看護婦『でもあなたって不思議ね。ゾンビ菌に侵されながらもうまく共存していて、かつ回復力も尋常じゃないわ。まあ寝てる時だけだけど。』

武田『ハ、ハハハ…』

実は言う俺、あの黒服によってtーウィルスを投与されたんだ。まあ無事細胞と結び付いて生き返ったんだけどな。

看護婦『ま、投与されてから意外と時間が経っているから問題ないわよね。また言うけど安静にしてね。』

武田『は、はい。ありがとうございます。』

看護婦は俺の返事を聞いて病室から出てった。その後俺は妙な胸騒ぎを覚える。

武田『…何か嫌な予感がする。』

俺はここを退院した後の未来に、何らかの嫌な予感があると何と無く考えていた。今の俺にはこの予感が当たらないことを祈るしかない。

武田『よし、今日は寝るか。』

そう言った後、まだ残ってる疲れを採るために、また眠りに入ったのだった。

|
|
|
|
|
|

第三話く提案と拒否く

2016年7月30日 14:33

く福生市の病院く

武田『さくとと、退院後はどうしようかねえ。』

俺の名は武田 清継。あの事件の終盤、ミズホ・アンブレラ社の特殊部隊：smartelevenfに救助されたため、俺は九死に一生を得た。今は福生市に有る病院でリハビリを含み入院中である。誰も居ない病室で一言そう呟いたあと、棚に置いてある資料を見た。

武田『ん？何だ？何であるんだっけ。』

不思議に成って考えていると、昨日の夕方に起きた出来事を思い出したのだ。

武田『あーそうだ。昨日は数人のミズホ・アンブレラ社関係者がここに来たんだっけ。』

そう。実は昨日、ミズホ・アンブレラ社は黒服に利用された挙げ句に騙されてしまったと言う事をお見舞いに来たミズホ・アンブレラ社の関係者が話してくれた。そのお陰で大分謎は解けたが、なかなか解けてない一つの疑問がまだ頭に残っていた。

武田『昨日ミズホ・アンブレラ社の関係者がそう話してくれたんだが、何か怪しんだよな。隊長達も未だ行方不明だし。もしミズホ・アンブレラ社で無ければ何なんだ？』

俺がそうやって考えていた所に、ビシツとスーツを着た男が俺の居る病室へ見舞いにやって来た。

？『よう、武田。元気か？…何だった？』

武田『まだ何も言っただよ！』

ビシツとスーツを着た男は土方俊則。赤嶺研究所の調査に参加しなかったstaff隊員である(因みに彼は別の場所で調査をしていた)。

土方『すまんすまんww:で、他の仲間から聞いたぜ？赤嶺研究所の調査に参加した全員のZECTteamがお前を除いて全滅だったな。』

武田『ああそうなんだよ(いきなりだな…)。まさかあの隊長までもが行方不明になるだなんて…。』

土方『まあ隊長が不在じゃstarfは“解散”かもしれないな。全く、悲しいぜ。』

武田『…そうだな…で、今のstarfの隊長は決まったのか?』

土方『いいや、まだ決まってる。多分瑞穂警察はこのまま隊長が決めさせないで、自然消滅と言う方向に持っていかなさるだろうね。全く、感じ悪いことしやがって。』

武田『そうか…(おのれ、瑞穂警察!隊長が居なくなったからってstarfを馬鹿にすんなよ!)。』

実はstarf、瑞穂警察の管轄地域内では評判がとても良いのだが、一方警察内では批判が多いのだ。何故なら、starfが結成される前にいた警官たちの仕事がstarfの活躍のせいで減ってしまい、彼らの評判も落ちてしまっているからだ。そんな中でも、彼らが反発できなかったのは、俺より速くウイルスを投与している隊長の底力を恐れていたから。その為、隊長が居なくなったことにより、彼らの反発力が強く成ってしまい、現在のstarfはぼこぼこにされているのが現状で有った。

土方『で、お前はどうすんだ?もしかしたらstarf解散だぜ?』

武田『そう言うお前はどうかするんだよ…。』

土方『俺か?俺は流浪の警官をやってみたいな。』

武田『そんなの存在するのかよ(苦笑)。お笑い芸人の方が良いんじゃないの?』

土方『まあそんなことは良いだろ。で、お前はどうするんだよ。』

武田『うくん…。』

俺はどうするかで物凄く悩んだ。何故なら、starfのおかげで沢山の思い出が出来た“我が家” 見たいな物だ。だから解散は絶対に嫌だった。どうにかして解散に成らない様に考えた末に出た答えがこれだった。

武田『starfを一新する!』

土方『そうか…ってえつ?』

流石に土方は驚いてしまったらしいが俺は話をそのまま続けた。

武田『だから、starfを一新するって言ってるの!』

土方『そ、それは何故?』

土方がそう聞いてきたので、俺はこう返答した。

武田『俺は隊長の居なくなつたstarfを一新して再び活躍する。そして、隊長が居なくても大丈夫だと言う事を他の警官たちに証明するんだ!』

土方『そ、そうか。で、でも署長が承知してくれないんじゃない?』

武田『したら俺は……俺は警官を辞めてやる!』

土方『ま、マジかよ……』

俺の話聞いて驚いたようだったが、土方は少し黙つた後、口を開いた。

土方『分かつた、その案に乗るよ。』

武田『え?』

今度は俺が驚いている。何故なら、土方は普段、人の意見や案に賛同しない人だからだ。

武田『な、何故賛同したんだ?』

土方に何故俺の案に賛同したのかを聞いた。するとこんな返答がきた。

土方『starfの一員として当然だろ。』

武田『そ、そうか。』

土方『まあ反対しても良かったのだがね。でも、武田が計画するんだ、信頼を持つて賛同してみても良いかなと思つたんだよ。まあ辞職は反対だが……』

武田『そ、そうなのか?あ、ありがとな!土方!』

俺は正直嬉しかった。初めて自分の案に賛成する人がいたのだから。

土方『ああどうって事ないぜ。では俺はこれで。まだ仕事があるから。』

武田『おう、仕事頑張れよ。』

土方『ああ、じゃ!』

土方はそう言ってまだ残っている仕事を片付けに病室を出ていった。一人と成った俺は、「退院したら必ずやり遂げる」と誓って、体のリハビリに向かったのである(あの事件で仮面ライダーに成った際に右足を負傷したため)。

2016年8月24日 15:24

瑞穂警察署―刑事課長室

？『何イ?!starfを一新するだど?!ふざけるな!』

武田『で、ですが、そこをなんとかお願いします!!』

俺は約1ヶ月ぐらいの入院を経て瑞穂警察署に戻ってきた。そして、帰還退院してから1週間後に、刑事課長の川口 孝文にstarf一新案の話をした。因みに川口 孝文とは、starfの結成前に居た警官の中で(隊長を除けば)トップクラスのベテラン警官であった。彼もまたstarfの活躍で被害に有った人でもある。

川口『何度言っても嫌だね!!なんせ、俺の立場や活躍が全部starfに持っていかれたんだ!冗談じゃないよ!』

武田『きよ、協力してください!お願いします!!』

川口『何度言われても無理だ。本当に協力出来ないね。残念だが、他をあたってくれ。』

俺は何度も説得を試みるが、川口課長はなかなか賛同してくれなかった。やはりstarfは警察からの評判が悪いなと思って、俺は最後の手段に出た。

武田『し、しかし……分かりましたよ。starf一新案は諦めます。』

川口『ほほう、そうかそうか。』

武田『それと共に、私は警官を今日限りで辞めさせていただきます!では失礼。』

川口『ほほう、そうかそう……っておい！ちよつと待てよ！おい！』
俺は呼び止める課長の声を無視して刑事課長室を出て、警官を辞めた。こんな分からず屋と一緒に働くのはもうゴメンだからだ。

2016年8月24日 15:38

〜瑞穂警察署―捜査一課オフィス〜

土方『警官を辞める？お前バカじゃないの？』

あのあと俺は、土方に警官を辞めた事を伝えたら、奴が怒鳴り始めた。

武田『だって、川口課長から認証を受けられなかったんだ。諦めて辞めるしかないよ。』

土方『だからって辞職は無いだろ！一緒に仕事をした仲じゃないか！！この警察署を見捨てる気か？』

武田『す、すまん。だが決めたことなんだ。本当にあの分からず屋と一緒に働くのは嫌なんだよ。分かってくれ。』

俺は後悔していた。もつと深く考えられれば良かったと。だが、もう決めたことをわざわざ変えたり、取り止めたりするわけにはいかない。俺は土方へ向けて最後にこう告げた。

武田『…あの刑事課長が変われば、俺は再び入ってやるよ。それまでじゃあな土方…元気だな！』

土方『そんなの…っておい！ちと待てい！』

土方の止める声をよそに、俺は瑞穂警察を去って行った。警察署を出てしばらくしたところで一回立ち止まって振り返って見た。だが、戻ることなくまた再び歩み始め、そのまま前へと進んで行ったのであった。

2016年8月24日 16:00

〜瑞穂警察署―捜査一課オフィス〜

土方『これで瑞穂警察署はほぼ無力となった…どうなるんだこの先…』

俺の名は土方 俊則。武田 清継と一緒に働いていた同期だ。そんな武田から突如辞職したと言われ、俺はもう反対したものの彼はここを去って行ってしまった。

土方『…必ず戻ってくるんだぞ…武田。』

俺は少し黙った後にそう言って、自分が担当している事件の解決に取り掛かった。

2016年10月20日 13:02

〜羽村市の廃工場〜

バキユン！バキユン！

ダダダン！ダダダン！

土方『チツ！駄目だ。テロリストらは全然退かない。』

俺は羽村市に有るとある廃工場で、国家内乱罪に問われているテロリストと銃撃戦を繰り広げていた。

土方『ちくしょう！武田が辞職しなければこんな目に成らなかったはず！』

武田が警官を辞めてから既に56日が経っていた。瑞穂警察署は武田が居なくなつたのを期に弱くなり、評判もすぐく落ちてしまい、今は瑞穂警察の管轄範囲が縮小される寸前で有つた。因みに、starfは9月1日を持って解散された。

バンバン！バンバン！

？『それぐらいでへこたれるな！土方！今こそ盛り返すんだ！』

バン！バン！バン！

土方『分かつてますよ、川口課長！』

ババン！

今俺が話し掛けた人は、川口 孝文刑事課長だ。実は、意外にも川口課長に才能が有ると見込まれてペアになり、今では一緒に事件に関わることが多くなつていた。現在の瑞穂警察署を代表する人物と成つた。

ババン！カチツカチツ！

土方『刑事課長！もう駄目です！弾が有りません！』

川口『何！他の物で応戦しろ！』

バン！カチツカチツ！

川口『ちくしょう！こつちも弾切れだ！全く、starfが居ないとこんなにも辛いのか！』

土方『ど、どうします？刑事課長。』

川口『チツ！しようがない、一旦退くぞ！』

土方『はい分かりました！』

俺達はもう残らない銃弾を見てそう判断し、一旦羽村市の廃工場から退くことにしたのだつた。果たして、俺と川口課長は生きて帰ることが出来るのであろうか。

|
|
|
|

| | | |

第四話く認証と疑いく

2016年10月20日 13:46

く瑞穂市営第一市民グラウンドく

土方『ハア：ハア：ぶ、無事、に、逃げ切れましたね。』

俺の名は土方 俊則。羽村市にある廃工場でテロリストを鎮圧すべく戦っていたが、余りの抗戦と銃弾の足りなさで撤退して今に至る。

川口『チツ！もつと体術を身に付けるべきだった。：取り敢えず、増援を呼べ。今のままじゃ無理だ。』

土方『わ、分かりました。では警察署にご報告します。』

川口『頼んだぞ。』

俺は川口刑事課長に命令され、瑞穂警察署と連絡をする事になった。しかし、何故か警察署と繋がらない。

携帯《トウー、トウー、トウー：：》

土方『：：刑事課長、署との連絡がとれません。電波が悪いようです。』

川口『な、何？そんなはずは：：：：：：：：：：：：：：：：!!』

土方『ど、どうしたのです？』

そう言いながら川口課長は、電線の所に視線を向けたまま、啞然としてしまった。俺は疑問に思いながらも視線を電線に向ける。すると、何らかの化け物が電線に乗っていた。

土方『な、何なんだ？アイツ：：。』

俺は言葉に出せないほどの存在感を放つ化け物に動揺していた。しばらく啞然としたあと、川口課長に聞く。

土方『：：刑事課長、アイツは一体：：。』

川口『私にも分からん。だか、静かにするんだ。奴は寝てるぞ。』

そう言われた俺は、化け物をよく見ると確かに寝ていた。刑事と言う階級にいるとはいえ、なかなか鋭い観察力である。そんな川口課長に感心していると、俺に話し掛けた。

川口『おい、そつと行くぞ。起こしたらヤバイことが起きるから

な。』

土方『わ、分かりました（何うまいこといつてんだ）。』
小声で指示が終わり、静かにその場から逃げようとしたその時だった。

チャリーン

化け物《ヴウウウ…》

誰かのお金が落ちる音がしたのだ。その音に反応して、電線上の化け物も目を覚ました。俺は化け物を見て、これからこんな奴に殺されるのかと絶望しながら硬直してしまった。すると、川口刑事課長が俺に向かつてこう言ってきた。

川口『土方！なに絶望してんだ！お前は死にたいのか？』

土方『い、いいえ！』

川口『じゃあ携帯用槍を持って対抗しろ！弱点を見抜いて突けば倒せるはずだ！早くしろ！』

土方『は、はい！分かりました！』

俺は川口課長に渴を入れてもらったあと、携帯用槍を持って戦闘体勢をとった。

化け物《ヴルウウ…》

化け物も俺達の方を向き、襲い掛かる体勢をとっている。そして何処かの鳥が飛んで行ったのを合図に戦いが始まった。

化け物《カヴウウ！》

川口『来るぞ！』

土方『は、はい！』

川口刑事課長は化け物に向かつて頭に槍を刺そうとする。しかし、かすりともせずを外れ、化け物の体当たりによって地面に強打してそのまま気絶してしまった。

化け物《ガヴウウ！》

ブン、バシッ！

川口『グハア！』

ドタン！

土方『川口課長！何て言うことだ………化け物の体当たりで気絶し

てしまうのか!』

俺は川口刑事課長がやられて動揺した。その隙をついたのか化け物は俺の方向に向かって攻撃を仕掛けてきた。

化け物《カヴルウウ!》

土方『な、く、来る!』

気づいたときにはもう近くに来ていたため、もう駄目だとして死を覚悟し、呆然と立ち尽くしていた。その時であった。

?《グレネードfire》

化け物《グガヴウ?!》

土方『?』

何者かが攻撃して化け物を怯ませたのだ。不思議に成って後ろを振り返る。するとそこに、仮面ライダーシステムを利用した人が立っていたのだ。俺は急展開で動揺してしまう。

土方『だ、誰だ?何が起きたんだ?』

俺はそう言っておそろおそろ後ろを振り返ると “仮面ライダー” が立っていた。

? 『大丈夫か土方。怪我してないか?』

土方『な、何故俺の名前を知っている!』

どうやら正体不明の男は俺の名前を知っているようだ。怖くなった俺は携帯用槍を仮面ライダーに向ける。すると仮面ライダーは俺に向かって喋り出す。

仮面ライダー『安心しろ、俺はお前の敵じゃない。まあ今は危ない状況だから話は後にしよう。』

そう言い終わると仮面ライダーは視線を俺の後ろ居る化け物に向けたのを感じ取った。

仮面ライダー『面倒だから一気に片付けるぞ。ケルベロス—G。』

ケルベロス—G《ガヴウウ!》

何と、化け物の名前も知っていた。俺は更に怖くなり一步後ろに下がった。しかしそんな俺を気にせず、化け物に集中する仮面ライダー。

土方『な、何なんだこの雰囲気は。』

俺は思わず声を出した。それを合図かの様に仮面ライダーと化け物が動き出す。化け物は爪を尖らせて掛かり、仮面ライダーは拳を針のように構えてすれ違うように攻撃をした。

ケルベロス―G《…》

仮面ライダー『…』

土方『ど、どっちが勝ったんだ？』

すれ違うように突撃したあとしばらく動かない仮面ライダーと化け物だが、化け物は胴体を真つ二つに成って倒れた為、先手を打ったのは仮面ライダーだった。

化け物《グガアツ！》

バサリバサリ…

仮面ライダー『…』

黙る仮面ライダーに向かって声をかけようと近付いたその時だった。急に手で来るなど合図して化け物の方を見る。すると化け物は胴体を再生しながら立ち上がってきた。

土方『な、何故だ！』

仮面ライダー『ほう、奴は頭を破壊しない限りは何度でも再生して復活するのか。』

落ち着いた口調で語ったあと、再び化け物の方に身体を向けてまた喋り出した。

ケルベロス―G《ガガヴウウ！》

仮面ライダー『…手加減は無しだぞ。受けてみよ！』

ベルト《full power hand Spear！》

仮面ライダーが喋り終わった後、再び化け物へ攻撃を繰り出した。

土方『同じことしても無駄なんじゃないか？』

俺は仮面ライダーは向かって声をかけるが反応なし。だが仮面ライダーは、パンチのパワーを最大にして攻撃を繰り出したため、無事ケルベロス―Gを倒したのだ。

仮面ライダー『もう蘇るなよ。』

そう言うとケルベロス―Gは突き抜かれた身体を再生もせずそのまま死んだ。

土方『凄い：一体誰なんだ？』

俺がそう言った後、仮面ライダーは死体を始末してから俺の所へ歩いて来た。そして、向き合う様な体制でしばらくは立ったままだった俺達に気絶から目を覚ました川口課長が声をかけた。

川口『あ、あんた誰だ？』

土方『川口刑事課長！もう大丈夫ですか？』

川口『ああ大丈夫だ問題ない。所で、お前は誰何だ？見た限り敵では無いだろうが……』

土方『そ、そうだ。お前は誰だか聞いてなかったな。』

俺達は正体不明の仮面ライダーに問いかけた。すると仮面ライダーは語り始めた。

仮面ライダー『俺は……』

土方『どうした。言えない事情でも有るのか？』

そう言う謎の男は黙ったまま仮面ライダーシステムを解除した。俺は解除した正体不明の男の姿を見て驚いた。

土方『お、お前は！』

2016年10月20日 14:04

〜瑞穂市営瑞穂グランド〜

土方『お、お前は！』

川口『武田!』

武田『久し振りだな：土方に川口課長。』

俺は武田 清継。約1ヶ月半も姿を消した俺は、自分の家からそう遠くない場所で騒ぎが起きていることを知って駆け付けたところ、土方達がケルベロス―Gに襲われてた為に仮面ライダーに変身して現したのだ。

川口『お前は何していた。』

武田『独りで調査してたよ。』

川口『1人で？こんな長い間何を調査してたっていうんだ？』

武田『赤嶺研究所に関連する事件だ。』

川口『単独捜査か。下手したら何されるかわからないぞ？』

武田『だから警察署を抜けたんだ。お前にいくら説得しても賛同してくれなかったからだ。』

そう言うと川口は少し反省し素振りを見せ、この俺にこう言ってきたのだ。

川口『それはすまない。私はstarfに出番を取られたから反対したが、今となってはstarfのありがたみを知ったから賛同する。反論も異議もない。』

意外な言葉に俺は驚いた。だってstarf反対派の川口がそう言うんだから。

武田『そうか、ありがとな。』

川口『ああ、俺はただデスクに座っているだけの男だ。しかも、お前が部下なのはやめても変わりない。だから今までを反省してお前に賛同する。』

土方『川口課長…。』

武田『じゃあstarfの最高責任者に成ってくれるのか？』
俺がそう聞くと、川口課長は頷いてこう言ってきた。

川口『ああ喜んで引き受けよう。ただ不審な動きはよせよ。ここは色々物騒だからな。』

土方『よ、良かったな！武田！』

武田『ああ、ありがとよ。そう言えばもうひとつお願いが有るんだけどよ。』

川口『なんだ？ なんでも言ってくれ。』

武田『じゃあ言うけど、俺を警官に戻してくんないか？』

土方『え？…川口課長はどうでしょうか。』

川口『警官かあ。よし分かった、私の直属の部下として戻そう。それだったら俺のボディガードもお願い、とか言っちゃって。ハハハ…。』

そう言う川口課長に少し苦笑するも俺は了承し、こう返した。

武田『良いぜ、川口課長。何せ俺は川口課長にはないウイルスを授与してるからな。』

すると逆に川口課長が苦笑し始めてから喋り出す。

川口『怖い事言うね君。ウイルススって言葉の響きだけでも充分の恐怖を持たせるんだよ。ふふふつ（苦笑）』

そう言い終わった後一同はもう既に仲を取り戻していった雰囲気だった。

武田『まあこれからも宜しくな。土方に川口課長。』

土方『ああ！一緒に本条達を探しに行こうぜ！』

川口『うむ、だが本条の奴、一体どこに行ったんだ…』

武田『さあ俺にもまだわからない。だが、隊長をさらった奴は仮定であるが掴めている。』

土方『そ、それはどう言うこと？』

川口『誰だか、この場で言えるか？』

武田『言えなくはないが、続きは明日ぐらいにしよう。俺が警官に戻ったらstarfの残党も集めて言う。警察署でな。』

川口『分かった、待ってるよ。』

武田『おう。その為にも警官復帰をお願いしますね。』

川口『おう、出来るだけ頑張ってみるよ。』

そう言うとは皆は瑞穂ブランドを去っていったので有った。

|
|
|
|
|
|
|

第五話く報告と作戦く

2016年10月25日 12:00

く瑞穂警察署―刑事課長室く

武田『よし、こんなものかな。』

俺の名は武田 清継。川口課長の進言によつて無事に警官を復帰した俺は、昨日いた俺たちやstarf残党を川口課長の部屋に集めた。

川口『もう準備は良いか？武田。』

武田『ああ良いぜ。始めてくれ川口課長。』

川口『了解。』

俺がそう言うと、川口課長は皆がいる方に顔を向けて声をかけた。

川口『皆よく集まってくれた。皆を集めたのは他でもない、本条や久松が何故消えたかだ。』

川口課長がそう言って声をかけた瞬間、集まった皆がざわめき始めた。

警官1『知ってる人が居るんですか？』

川口『そうだ。よしじゃあ武田君、例の件話してもらうか。本条達をさらった奴の正体は誰なのか。』

警官2『た、武田警部が？』

警官3『そんなまさかだよな…。』

武田『まあまあ皆静粛に。これから情報を言うから静かに聞いてろよ？。』

俺が喋り出すと、ざわめいた皆は静かに成った。それを確認すると、また口を開く。

武田『よしじゃあ言うぞ？落ち着いて聞いてくれよ？一応仮定ではあるが、本条達をさらった奴はと言うとな。』

starf残党一同くゴクリ…く

武田『ミズホ・アンブレラ社だ。』

starf残党一同くえ？く

川口『なつ何故ミズホ・アンブレラ社が?!』

そう言い終わると、川口課長含む全員が驚いた。まあ驚くのも当然だ。tーウィルスの殺菌剤まで発売している善良な会社だからな。そう思っていると、土方が俺に聞いてきた。

土方『な、何故なんだ？』

武田『それはだな…』

俺はそう言いながら、調査してきた資料や写真を部屋に有ったホワイトボードに貼った。

武田『この赤嶺研究所での事件が関連しているんだ。』

川口『つまり、会社特有の裏の顔か。恐ろしいねえ。』

武田『そう、会社特有の裏の顔なんだが、まずこの資料を見てくれ。』
そう言って貼り出したものとは別の資料を皆に渡した。その資料とは、赤嶺研究所に有ったものが沢山揃っている写真である。

武田『単独調査で得た赤嶺研究所の遺留品だ。』

土方『仮面ライダーステム』に『tーウィルス』、ミズホ・アンブレラ社のロゴが入った『拳銃』に『爆弾』…一杯ありますね。』

川口『そうだな…。』

武田『この赤嶺研究所はミズホ・アンブレラ社が所有する敷地で、密かにこう言った武器や生物を保存していたんだ。』

俺がそう言うと、そこにいるstaff残党一同は揺らぐ。すると、その資料を見ながら、こんな言葉を放った。

川口『あいつらの目的はなんなんだ？こんな物騒なものを持ってよう。薬屋は薬だけ売ってろよ全く…。』

武田『今、川口課長が放った言葉。実は過去に存在していた会社にも当てはまるんだ。』

川口『存在していた会社？ 何なんだね、それは。』

武田『課長は知らないか。じゃあ土方はどうだ？』

土方『うーん、俺にもさっぱり分からんな。』

警察1『わたくしも分かりません…』

警察2『俺も…』

そうやって一人一人に聞いてみたのだが、意外にも『その会社』を知らないらしい。なので、俺はヒントを出すことにした。

武田『皆知らないか…じゃあ言うぞ。まあまずはヒントだ。2004年に倒産となった会社は何だ?』

警察3『へ?』

川口『武田君すまん。最近デスクばかりで余り記憶がないんだよ。で、土方君は分かるかね?』

土方『少しなら…』

武田『じゃあ何だ?言ってみろ。』

土方『でも、余り自信ないからまたヒントをくれ。』

武田『仕方無いな、じゃああれだ。さつき言った会社名の中にも隠れているぞ。』

そう言つて俺は『ミズホ・アンブレラ社』と書かれた紙を窓に貼つて指で差した。

川口『私は本当に分からん…すまないな武田君。で、土方君は分かるかね?』

土方『あああ!』

川口『ど、どうしたんだいきなり叫びだして…な、何か分かったのか?』

土方『分かったあの企業か!『アンブレラ社』だろ!』

武田『そうだ土方。正解だよ。』

そう、過去に存在していた会社とは『アンブレラ社』の事だったのだ。するとそれを聞いた川口課長が喋り出す。

川口『…ああ成る程。ミズホ・アンブレラ社も同じ事をしてたんだな、違法な事を。』

流石川口刑事課長、察しが良い。そう聞いた俺は頷いて話を続けた。

武田『その通りですよ川口課長。ミズホ・アンブレラ社は過去に存在していたアンブレラ社同様に違法な生物実験を行っていたんだ。』

警官1『な、何だと?』

警官2『おい嘘だろ?』

警官3『何故なんだ?』

すると部屋に居る一同はざわめき始めた。そりやそうだ、さつきも

言ったがミズホ・アンブレラは善良会社だからそうなるのも無理はない。すると、土方が一同を静めたお陰で話せるように成った。

土方『武田、皆を静まらせたぞ。』

武田『ありがとな土方。じゃあ話すぞ？何故違法な行動をとってるかは分からない。だが、そのミズホ・アンブレラ社が本条達を拐った事については、多分「アンブレラ・ジャパン社」が秘密裏に行った計画で何かしらのウイルスを投与して逃げた本条に目をつけて拐ったのではないかと考えたんだ。』

土方『な、成る程ですね。そうなりやこの事件は…』

武田『自作自演だったというわけだ。』

川口『会社の自作自演か。アメリカと一緒に裏がひどいな。』

土方『なんて会社…信用が失せます。』

警察1『全く酷いです…。』

武田『ミズホ・アンブレラ社に失望しているところすまんが、次にこれを見てくれ。』

俺はそう言った後、赤嶺研究所で行ったろう生物実験の写真を見せた。なかには幼い子供に「ウイルスを投与した悲しい写真も有った。

警察2『なんだこれは…』

土方『ひ、酷い。』

川口『これを写真に収める奴らは正当な奴らじゃないな、一度乗り込んだ方がいいんじゃないのか？私はそう思うが。』

警察3『そうですよ！乗り込みましょう！』

そう正論を言う川口課長だが、実は、いかないのだ。俺はこう返答した。

武田『川口課長や他の警官の言うように、確かに俺もそう思ったのだが、他の研究所に入るには厳重なバリケードを乗り越えなきゃ成らないんだ。』

警官4『何だと…？』

土方『それは面倒だな。』

川口『ちつ、バリケードがあるって調子乗りやがって。もつといい

方法は無いのか？こいつらの暴走を止めないと。』

武田『まあ確かに調子に乗っているな。だが…』

土方『だが？』

川口『だが何だ？何なんだ武田君。』

俺は川口課長達にそう言いかけたあと、少し間を開けてからこう話した。

武田『だが、侵入する方法はある。』

土方『へ？』

川口『なんだ、何なのか言ってみろ。』

武田『実はな、この瑞穂警察署内にミズホ・アンブレラ社のスパイが紛れ込んでいる。』

starf 残党一同《え？》

これにも皆が驚いた。だって、色々功績を上げて活躍中の瑞穂警察署にスパイが居るんだから。

川口『す、スパイだと？それは何故だ？』

武田『あくまで俺の推測だが、俺たちがミズホ・アンブレラ社の違法な行動を嗅ぎ付けてこないように警察の行動を監視していたんだ。』

警官1『か、監視…』

警官2『な、成る程…』

そう言った俺に成る程と他の皆は頷いて理解した。すると、土方が俺に向かってまた喋り出した。

土方『あーだから部屋の周りを嚴重に調べていたり、警戒したりしたんですね。やっと分かりました。』

そう、今日こうして皆を集める前に、嚴重に部屋の中や周りを調査した。スパイに聞かれたら行動しにくくなるからな。俺が頷いたあと、川口課長が喋り出した。

武田『俺が意味もなくやるかって言うんだよ。』

川口『そうか、だからか……で、これからどうするんだ？そのスパイを捕まえるのか？』

武田『そうなんだが……実はスパイは赤嶺研究所の事件が起きた

翌日に何故か全員撤退している。』

土方『な、何だと?! て、撤退したならもう駄目じゃん。もう侵入する方法が無いぜ。』

そう言った土方は床にガタンとへこむが、俺は首をふって話を続ける。

武田『いや、確かに“赤嶺研究所事件前”に居たスパイは撤退したが、“赤嶺研究所事件後”のスパイは導入されている。』

川口『だから一応大丈夫って言う訳だな。武田君。』

警官4『なんだくそうでしたか。』

武田『その通りだよ。そもそも会議する前に嚴重に整備をしたと言っていたがな……まあ良いのだがな。』

こうして話した後、土方がまた俺にこう問いかけてきた。

土方『し、しかし、そのスパイの名前なり特徴なり色々分かるのか?』

自分『いいや、全く分からない。』

そう答えた俺に隊員達がざわめくが、そんなの気にしない。そうしている川口課長がまた問いかけてきた。

川口『どう言うことだ武田君。思う存分調べたと言うのに何故まだ分からない。まさか、忘れたと言うのではないな?』

武田『いいや違うって、人の話を聞けよ。実はその情報についても単独で調べたのだが、それを記載してある資料が一切見つからなかったんだ。只、新たなスパイが導入されると言う情報までしかなかっただよ。多分、スパイによる行動だとは思うんだがな。』

土方『そうでしたか……で、その特徴とかが謎に包まれた新たなスパイを私達で見つけるわけですね?』

武田『そうだ。長い間単独で調べておきながら、情報不足で本当にすまないな。』

川口『良いき、単独調査でこんなにも情報が揃ったんだ。ミズホ・アンブレラ社に仕返しをしようぜ。』

そう言ってくれた川口課長に感謝した。俺は川口課長達にこう告げた。

武田『じゃあこれから作戦に移るが、その前に分からないことなどを質問したい奴は居ないか？』

starf 残党一同《…》

土方『無いようですね。』

武田『そうか、なら良いんだ。』

川口『よし、じゃあ俺は何からすれば良いんだ？武田君。』

武田『では、川口課長は赤嶺研究所の事件が起きた日から二日後に入社した新人警官を何人が調べてくれ。』

川口『了解。』

武田『土方は三人ぐらいの人とチームを組み、一緒に警察署敷地内の散策をしてくれ。もしかしたらミズホ・アンブレラ社の物があるかもしれないからな。』

土方『分かった、出来るだけ頑張るよ。』

武田『次にお前は……………』

こうして俺は一人一人に役割を割り振った。そして、ある程度役割を言ったところで、余った警官達にはこう声をかけた。

武田『よし、まだ俺から何も言われてない他の警官達は警察署内や署外の噂話等に耳をたてておけ。分かったか？』

starf 残党一同《へい！》

武田『よし、じゃあ今日は解散だ。早速皆で割り振りられた仕事に取り掛かってくれ。』

川口課長とstarf 残党が返事をしたあと、早速警察署内の散策や監視を分担して行動に移った。すると川口課長が近づき、こう話しかけてきた。

川口『本当にお前の調べてきた資料等は合ってるのか？』

武田『ああそのつもりだが、完全ではない。何せ単独での調査だったからな。』

川口『分かった。じゃあこれから仕事に移る。武田君も余り無理はするなよ。』

武田『分かってますよ。』

俺は川口課長にそう言ったあと、彼は頷いて俺が指示した仕事に

移った。

武田 『俺はよりの確な情報を得てこないとな。』

そう呟いた俺は、自分のやるべき仕事に移ったのであった。果たして、俺達の調査に何か良い情報がやって来るのあろうか。

| | | | |

第六話く情報と推測く

2016年11月25日 9:00

く狭山茶後藤―縁側テラスく

武田『うーん…何故かなあ……………』

俺の名は武田 清継。刑事課長室で作戦を実行してから早30日が経った。俺は懸命に働いたおかげで川口刑事課長の側近に成っていたのだが……………まだ問題が有った。

武田『なかなか掴めん！後残り8人をどう調査したら良いのか……………』

そう、まだスパイについての情報が無い。川口課長によると、あの事件のあとに瑞穂警察へ入った新人警官は13人らしい。その中の5人を徹底的に調べたが未だ情報を掴めていないのだ。

武田『ハア……………しかし、ここは本当に落ち着くね。狭山茶後藤店は。』

俺は今、狭山茶後藤と言う店に来ていて、その中の縁側に設置してある席で作戦の強化を考えながらお茶を飲んでいた。すると誰かが俺に話し掛けたのだ。

？『随分とお困りのようですね、武田さん。』

武田『ん？おつ！お前は店長の光世じゃねーか！久し振りだな！元気にしてたか？』

後藤『はい、久し振りですな武田さん。』

俺に話し掛けた奴は後藤 光世という人で、あの事件である “赤嶺研究所事件” にてしんでしまった後藤 武の兄に当たるとても真面目な人物だ。偶然にも、俺が警官を辞めたときに光世も警官を辞め、今や代々続く店の店長をしている。

後藤『武田さん、警官復帰おめでとうございます。』

武田『いやゝありがとな。それにしても今日の茶も上手いね。後藤園の狭山茶はさ。』

後藤『はは、ありがとうございます。…と、ところで武田さんは一体何に悩んでいるのです？』

武田『うーむ、実はな、瑞穂警察署内にミズホ・アンブレラ社のスパイがいるんだが…』

後藤『えっ！瑞穂警察署にミズホ・アンブレラ社のす、スパイが居たんですか？』

武田『ああそうだよ。その事についての対策が難しいところなのだよ。』

後藤『つまり、情報が余りないがゆえにどうしたらもつと効率よく情報を得られるかでお悩みなんですか？』

武田『そうだ光世よ。なかなか出てこなくてな、実に困っているんだ。』

後藤『そうですか…』

後藤がそう言ったあと、しばらく静かに成る。だが、後藤がまた再び口を開く事によって急展開に向かう。

後藤『スパイを聞いて思い出したのですが…実は私、怪しい人を見つけたんです。』

武田『ブツハア！』

俺は考えながらお茶を飲んでいたので、その一言で聞いた瞬間に吹いてしまった。

武田『ゲホツゴホツ！な、何だって？』

後藤『だ、だから、怪しい人を見つけたんですって言ったんですよ。』

武田『ほ、ほう、そ、そりや良い情報だ。で、それは誰何だ？』

後藤『はい、名前は笹平光継と言って、情報処理を担当する男性です。』

一応紹介する。笹平 光継とは、ウイルスを投与してないのにも関わらずそれに準ずる高い身体能力を誇り、パソコンも扱えるエリート階級の警官だ。

武田『笹平 光継？奴は赤嶺研究所の事件が起きる以前からいるエリートだぞ。そいつの何処が怪しんだ？』

後藤『あくまで僕の推測何ですが、情報処理をしているくらいですから何かしらの極秘ファイルを所有している可能性があります。』

武田『まあ確かにな。だが古いスパイは全員撤退したぞ。』

俺がそう言うのと、何処からかスパイ状況の資料を持ってきた。驚きながら後藤に聞いた。

武田『な、何故後藤が持っている?』

後藤『実は私も単独調査をしています。つまり、武田さんと同じ様に赤嶺研究所事件を調べていたんですよ。』

武田『そ、そうなのか。じゃあ何故素人のふりをしたんだ?』

後藤『すみません、私意外と理解が遅いんです。そのせいで他人事みたいな対応をしてしまったのです。本当にすみません。』

武田『そ、そうか。ま、まあ良いよ…で、資料で何が分かるんだ?』

後藤『はい、実はですね。この資料を詳しく調べた結果、ある単純な方法で分かったんです。』

武田『ほう、じゃあ見せてみる。』

俺はそう言いながら、後藤から資料を受け取る。その資料にはこう書いて有った。

— 瑞穂警察署スパイ状況 —

2016年7月16日

— 撤退 —

佐原佐之助

佐田大雅

田中英策

伊坂弥太郎

来光結城

三島拓斗

辻本幸左工門

辻井愛華

具島愛莉

2016年7月17日

— 参入 —

羽崎雄大

丁田博史

保田美智
内里亜紀
印田直治

しばらく読んでいたが、サツパリ分からなかったので、俺は後藤に問い掛ける。

武田『……これがどうしたというのだ？』

後藤『分からないですか……では次に僕の書いたものを縦に読んでみて下さい。』

俺は言われるがまま縦に読んで見たのだが、まだ分からなかった。

武田『“佐佐田伊来三辻辻具羽丁保内印”だな。』

後藤『まだ気づかないですか？』

武田『ああそうだよ。』

後藤『……じゃあ次はそれをカタカナで書いて見てください。』

そう言われた俺は、近くに有った紙に後藤が書いたものをカタカナに書き直した。

——ササタイライミツジツグハチヨウホウイン——

武田『書いたぞ。次はどうするんだ？』

後藤『じゃあ次はジを2つ、イを1つ抜かしてみして下さい。そしてらピンと来るはずですよ。』

俺は言われるがままその文字を抜いた。すると俺は有ることに気が付いてしまった。

武田『こ、これは！“ササタイラミツツグハチヨウホウイン”と成った！と言うことはこれを文に直すと“笹平光継はミズホ・アンブレラ社の諜報員”！』

後藤『こう言うことです武田さん。私が何故怪しいと言ったのか。それはこの単純な読み方から来ているのです。』

俺はあくまで推測と考えるおきながら、後藤 光世の監察力には感激した。たぶん川口課長も知らないのかもしれない。俺は後藤にこう話しかけた。

武田『凄いいじゃないか！ここまで確実に調べているとは！川口課長

に教えたら驚くぞ!』

後藤『はい、ありがとうございます。』

武田『他に情報は無いのか?』

後藤『はい、更に私も警察署内の警官を全て調べたのですが…実際上存在しない人が居ます。』

武田『やはりそうか。俺もづくづく気づいていたんだがな。お前は調べるの早いし确实だな。』

後藤『いやはやそれほどでも有りませんよ。』

そうやって照れる後藤を見て、俺はまだ解けない疑問を聞くためにまた話しかけた。

武田『おい、後藤。』

後藤『はいなんです?』

武田『お前は何故、こんなにも真剣に調査に取り組んでいるんだ?』俺がそう聞いた途端、後藤は少しうつむきながらこう話してくれた。

後藤『武田さんはあの事件をどう思います?』

武田『へ?あ、まあ皆を危険な目に合わせやがってって恨んではいるが…』

後藤『私は…弟を殺されてとてつもなく恨んでいるんです!あの…ミズホ・アンブレラ社”をね!』

武田『!』

俺は気の優しい後藤 光世がこんなにも怒りを露にしたのは初めて見た。俺は少し間を開けて喋り出した。

武田『ま、まさか、後藤。ミズホ・アンブレラ社を潰すために…』

後藤『そうですよ!弟をあんな化け物のいる敷地内に行かせたミズホ・アンブレラ社と言うブラック企業が凄く憎い!』

武田『そ、そうか。』

俺は後藤の怒りに少し引きながらも、少し考えてこう話した。

武田『じゃあ手伝ってやろうか?その復讐をさ。』

後藤『え?ほ、本当ですか?武田さん!』

武田『ああ本当だ。』

後藤『あ、ありがとうございます！』

武田『いやいや、俺も沢山の仲間を殺したミズホ・アンブレラ社に腹をたてていたところだ。お前と同じ恨みを持つものだから手伝ってやろうかなって思ったただけだ。』

後藤『武田さん……！』

武田『その為には、情報をより細かく得ることが必要だ。お前、協力出来るか？』

後藤『勿論です！この調査を全面的に支援しますのでミズホ・アンブレラ社を共に潰しましょう！武田さん！』

武田『ああ宜しくな。後藤。』

俺は後藤の熱意にちよつと後ろへ引いたが、こうして赤嶺研究所に関する調査がより細かく進展する事となった。

武田『しかし……』

後藤『ん？ど、どうしたんです？』

今のやり取りで謎が解けたが、テーブルに置いてある資料を再び見るとまた新たに謎が出来てしまった。

武田『何故こんな謎解きみたいな感じで資料が有るのだろうか……。』
そう、何故分かるように工夫がされていた資料が有るのかに今度は疑問を抱いていた。これには流石の後藤にも分からないらしい。

後藤『それもそうですね。何故こうして謎解き形式にしたのか私にも分かりません。』

武田『そうか。』

後藤『まあこれはあくまで私の予測する考えですので、外れるかも知れません。』

武田『それもそうだな。ま、その事は後に考えるとして、取り敢えず笹平光継の監視と聴取だな。』

後藤『そうですね。』

俺はそう言いながらカウンターに行き、お茶セットのお代を出した。

後藤『はい500円丁度お預かりします。ご利用ありがとうございます！
ました！またのご来店をお待ちしております！』

武田『おう、お前のお茶は上手いからまた来るぜ。』

そう後藤に言つて出ようとしたが、ふと言いたいことを思い出し、振り返つて後藤にこう告げた。

武田『あーそうだ、お前も近いうちに警官へ復帰するんだよ。』

後藤『はい！それはもう考えてありますのでご安心を。』

武田『そうか、じゃあまたな。』

俺は後藤の返答を聞くと店を出て行き、その足で瑞穂警察署に向かったのであつた。

）
????

? 『F・W様』

? 『何だ。』

? 『P1・S様からの連絡が来ましたので報告を。』

F・W『うむ、申せ。』

? 『はい。今、瑞穂警察署にゴハン・レッドフィールドが戻つてきたとの話が…』

F・W『ゴハン・レッドフィールドか…他には?』

? 『は、アリソン・クルーズがあこの事件の翌日に撤退し、その翌日に参入した警官を調べています。』

F・W『そうか。』

? 『他の情報もお聞きになられますか?』

F・W『いいやもうよい、下がれ。あ、奴にはあの土地で生物災害を惹き起こす際は気を引き閉めて事を行えと伝えろ。』

? 『かしこまりました。F・W様。』

F・W『フフフ…覚悟しろよ?ゴハン・レッドフィールド。フハハハハ!!!』

| | | | |

第七話く聴取と証言く

2016年11月27日 11:27

く瑞穂警察署―事務課く

武田『アイツだな？笹平光継つてのは。』

俺の名は武田 清継。俺はあの後、瑞穂警察署に戻り、川口刑事課長に報告。そして今は川口課長と共に、瑞穂警察内に有る事務課に来ていた。俺は後藤から渡された資料を基に事務課一帯を見渡す。するとパソコンの所に奴が居た。

川口『どうやら奴はパソコンに情報入力をしているようだぞ？取っ捕まえるか？』

武田『待つてください。ちよつと様子を見ましょう。』

川口『そうだな。』

パソコンくカチカチカチカチツく

笹平『よし完了。さてと、あの施設”に行くか。』

俺達が隠れてみると、笹平 光継と言う男は何か呟いて自分の席をはずした。

武田『あの施設”？』

川口『ん？どうしたんだ武田君。』

武田『いや、アイツが言った”あの施設”でちと引つ掛かってな。』

川口『そうか、それよりアイツがどっか行くぞ？着いてかないで良いのか？』

武田『そ、そうですね。では行きましょう！』

俺はそう言ったあと、川口課長と共に移動する笹平を追いながら無線機で他の仲間と連絡をとる。

武田『おい、笹平が席を離れたぞ。皆所定の位置に着け。』

無線く了解く

そうやって皆の返答を確認すると、銃を構えて笹平の後ろを着いたのであった。

2016年11月27日 11:33

〜瑞穂警察署―休憩スペース〜

笹平『フウ…』

武田『あなた、ちよつと止まりなさい。』

俺と川口課長はしばらく尾行し、休憩スペースで止まった笹平を関係者で囲んだ。

笹平『へ、は、何?』

武田『あなたが笹平さんですね?』

笹平『は、はい、なんです?』

川口『貴方をスパイ容疑でしばらく隔離します。署長からの許しも得ている。さ、質問室にきたまえ。』

笹平『へ?な、何て言うことですか?』

武田『とにかく質問室に来い。』

笹平『な、何のことだかサツパリなんですが…』

武田『署長お許しの命令だ。大人しく従うんだ。』

こうして混乱する笹平 光継を捕まえ、川口課長を先頭に笹平を囲むようにして質問室に向かって行った。

2016年11月27日 11:48

〜瑞穂警察署―質問室〜

武田『さあ白状しろ。お前はミスホ・アンブレラ社のスパイだな?』

笹平『だから、スパイじゃないって言ってるじゃないですか。』

川口『いい加減にしろ笹平!』

俺は川口課長と共にミスホ・アンブレラ社のスパイの疑いのある笹平光継に質問していた。

笹平『本当に私はミスホ・アンブレラ社のスパイじゃ有りません!』

川口『貴様!』

武田『まあ落ち着いてください課長。で、お前は7月14日に何していた?』

笹平『パ、パソコンゲームしてました。タイトルは「青鬼」っていうゲームでして……。』

川口『ゲームのタイトルを聞いたるんじゃない！一日何していたと言おう事だ！』

武田『まあまあ。その日何していたかを具体的にこの紙へ書きなさい。』

俺は笹平に紙とペンを渡すと彼はすらすらと紙に書き始めた。

――

――1時間後――

『笹平『書きました。』』

笹平が書き始めてから約1時間が経過していた。彼は俺に紙とペンを返却した。

川口『どれどれ見せて見い。』

武田『川口課長はまだ待つてください。』

そう言つて俺は笹平の書いた紙と目撃談やネット利用時間等を基にした資料を確認する。

――笹平筆時間表――

2016年7月14日

6:30 起床

6:35 朝飯

7:00～7:40 出勤

8:11～8:49 パトロール

8:50～10:30 情報処理

11:00～12:00 パトロール

12:10～13:20 情報処理

13:30～13:50 昼飯

13:55～15:05 情報処理

15:10～16:00 パトロール兼帰宅

16:00 夜飯、風呂、就寝

武田『パソコンゲームをやっていたっていうのは何処だ？』

笹平『情報処理の時間帯なら休憩時間にやっています。』

武田『うーん、川口課長。この資料と読み比べてみてください。』
俺は気になる点を川口課長に見せた。

→調査による推定時間→

7：00～7：40 出勤

市民証言）車で通勤しているところを目撃した。

8：11～8：49 パトロール

市民証言）白バイで何やら急いで他の場所へ向かっていた。普段は安全運転なのに。確か時間は大体8：20～8：30ぐらいの間だった。

市民証言）隔離されたアンブレラの旧研究所に入っていくのを目撃した。何やらケースを持って白バイに乗った。時間にしたら大体8：35～8：41ぐらいだった気がする。

8：50～10：30 情報処理

警察署内）何か急いで資料を移していた。なんの資料だ？と聞くと笹平はびくった様子でこつちを見ながらパソコンを閉じた。何かおかしかったな。

仙林）笹平は何か急いでいたな。聞いたら仕事が多いって返された。プリンターで何かを印刷していたようだ。印刷を終えたら、今度はケースを持ってパトロールに行ったよ。

11：00～12：00 パトロール

市民証言）白バイに乗ってまたアンブレラの旧研究所にケースを持って訪れたわ。警官なのに一帯何してるんだらうね。

12：10～13：20 情報処理

兜屋）奴はこの俺にアンブレラ社の事を聞いてきやがった。何が目的なんだろうて思いながら教えた。終わると10000円をくれたんだ。その日の笹平はおかしいなと思ったよ。

仁田）笹平の奴、アンブレラ社の資料をくれと頼んできた。潰れた

会社の情報を知って何がしたいんだろうな。

13：30～13：50 昼飯

警察署内) 食堂に行ったら笹平が出てきて、俺は「あれ、食堂は？」と聞いた。すると奴は別の警察署に友がいるから一緒に飯を食いに行くって言ってそんまんま歩いていった。

13：55～15：05 情報処理

異変なし

15：10～16：00 パトロール兼帰宅

異変なし

16：00 夜飯、風呂、就寝

市民証言) 彼はあるスナックに行ったわ。普段は夜間を出歩かない大人しいのにな。

武田『どうです川口課長。こんなに目撃情報が有るんですよ?』

川口『有無、確かにな。彼は普段そんなことしない。何かあるな?』

俺達は笹平が何か隠し持っているかと確信して質問を続けた。

川口『おい笹平。』

笹平『はい何でしょう。』

川口『8：11～8：49のパトロールにお前、何やったん?』

笹平『普通にパトロールですよ。』

武田『じゃあここに変わった目撃情報が有るのは何でだ?』

俺は笹平にパトロール部分の目撃情報を見せた。すると奴は少し焦りが見えたが、平気な顔に戻って何かの間違いですよと返してきた。俺達は次の資料を見せた。

武田『これはお前が使っていた白バイの記録だ。ここに急激のガソリン減りと書いてあったぞ。』

笹平『え? あ、だ、誰かが使ったんでしよう。』

川口『あのな、一日で急激にガソリンが減ってんねん。一人でこんな量に成るか?』

笹平『そ、それは……。』

武田『それは何だ?』

俺が聞いた後黙り混んでしまった。しばらく待っていると、笹平からこんな返答が来た。

笹平『貴方達の情報が正しいです。』

川口『フン、やつと白状したか。』

笹平『す、すみません。』

武田『全く…』

川口『で、何でスパイに成ったん。』

川口課長が笹平に疑問を問うと、笹平は少し間を開けてから喋りだした。

笹平『それは、黒服と取引を行っていたからです。』

武田『黒服?…その黒服とはいつ頃あったんだ?』

笹平『約6年前です。』

川口『ろ、6年前?』

武田『その間は何の情報を提供した?』

笹平『瑞穂警察署の行動です。あと、土地の再利用等の調査や警察署の監視です。』

川口『た、沢山有るな。』

武田『…何で引き受けたんだ?』

笹平『……俺の弟が危ないんだ。』

川口『へ?』

武田『お、弟?』

俺達は笹平に兄弟が居たことに驚いた。驚いて言葉が出なかったが、しばらくして俺が口を開く。

武田『お、お前に兄弟が居たんだな。正直驚いている。』

笹平『そうだろうな。例え親しい人でも家族の事は喋らない。相手がスパイの可能性が有るからな。』

川口『……で、弟が危ないと?理由を聞かせてくれ。』

笹平『はい…実は約6年前、久し振りに姉と弟と俺で墓参りに行っただ。』

川口『墓参り?』

笹平『俺の親が石江・杉田騒動で死んだ。』

川口課長が聞くと、笹平は辛いながらも言った。因みに石江・杉田騒動とは、1999年〜2010年まで及んだ第二次戦国時代の末期に行われた大戦。東京都内で約30万人の犠牲者を出したひびき時代だ。笹平が悲しんだので少し戸惑うが、話を続けた。

武田『悲しんでいるところすまんが、墓参り中に遭遇したのか？その黒服に。』

俺がそう言うのと、笹平は目を擦りながら言った。

笹平『いや、墓参りの帰り途中に黒服と遭遇した。俺と姉は逃げたが弟が逃げ遅れたために捕らえられ、交渉材料として人質にされたんだ。』

川口『そうか……で、スパイの条件を引き受けたんだな？』

川口課長がそう言うのと、笹平は目を擦りながら頷いた。それを見た俺はこう話した。

武田『そうか。すまん、ミズホ・アンブレラ社の質問に応じてくれて。だが一つだけ聞かせてくれ。』

笹平『何だ？』

武田『何故、あの施設に行くか』って言ったんだ？』

笹平『あれはミズホ・アンブレラ社の小作事業所に行こうとしたんだ。』

武田『ミズホ・アンブレラ社の小作事務所？』

笹平『そこに俺の弟がいる。俺は全ての責任を負って戦いに挑むつもりだったのさ。』

そう笹平が答えた後、しばらく静かに成るが、俺は少し考えて笹平に向かいこう言った。

武田『じゃあ俺がその任務を背負ってやる。』

川口・笹平『え？』

武田『だから、お前の弟を救いに行くって言ったんだ。』

笹平『い、良いのか？』

武田『何の理由も無く敵側のスパイに降ったなら協力はしないが、今の状況だと違う。俺も荷を担ぐの手伝わせてくれよ。』

笹平『あ、ありがとう……。』

武田『良いって事よ。まあ今日は遅いから、休憩所に泊まってけ。また明日事情聴取するからな。』

笹平『分かりました。』

そう言っつて俺は笹平を休憩所にて泊まらせ、俺と川口課長は帰ったのだった。

| | | | | |

第八話く潜入と異変く

2016年12月5日 8:00

くミズホ・アンブレラ社―小作事務所く

武田『此処だな?』

俺の名は武田 清継。俺は11月28日に笹平からミズホ・アンブレラ社の小作事業所に行く道や暗証番号等を聞いた。そして、その3日後に署から調査許可を得た俺達は準備万全な状態で、小作事業所へ向かい今に至る。

仙林『ここがミズホ・アンブレラの小作事業所か。まあまあデカイな。』

そう言ったのは仙林 弘樹と言う警官で旧starfのZECT teamに所属していた。今は新starfのZECT teamに所属している(因みに、11月1日にstarfを新設する形で復活を遂げ、今や総員40人という規模成った)。

菅家『あの中に笹平さんの弟が居るんですね?』

武田『ああそうだ。』

そしてこの俺に聞いてきた人は菅家 明莉。新starfで初の女性隊員で彼女のおかげで8人の女性が入隊した。

西宮『まあ良いからさっさと調査を済ませようぜ。』

そう早く急かす奴は西宮公太。大坂から来た新人警官で、強盗を一瞬で確保する等の功績を残す一流警官だ。

武田『まあ待て。今からこの門を開けるための暗証番号を入力するから。』

俺はそう言って笹平から聞いた暗証番号を手にも、門近くのに有る機械を操作する。

機械音《ピピピピ…ピー》

武田『よし開いた、慎重に行くぞ。』

隊員一同《応!》

皆は銃を構え小作事業所に侵入した。しかし、いざ侵入して見るとその事務所に違和感を感じた。

菅家『人が居なさすぎない?』

そう、嚴重に扉がロックされていたのに、全く人が居ないのだ。

仙林『もしかしたら、今日は休業日何じやないか?』

後藤『いいや、そんなはずはない。ミズホ・アンブレラ社の休業日は毎週土日で今日は月曜。休みでは無いはず。』

菅家に続き仙林もそう言葉に出すが、後藤はそれを否定した。

武田『後藤のいう通りだな。だが、別のことも考えられる。とにかく慎重に進むぞ。』

後藤『了解。』

そう言ったあと、慎重に前へ足を進めた。

|

|

|

|

|

2016年12月5日 8:30

く小作事務所―出入口付近く

武田『よし、着いたと。』

俺達は慎重に前へ進み、全く人に会わないまま小作事業所の建物内に一同は潜入した。

武田『しかしこれだけ歩いても、作業員らしき人すら見かけないとは…何か嫌な予感がするな。』

西宮『何かはめられてるに違うんちゃう?』

後藤『その可能性が高いな。こんなにも静かすぎる何てな。』

俺達の持っている疑問についてこう話していると菅家が俺達を呼んできたのだ。

菅家『武田隊長!この部屋に作業中の人が居ます!多分、作業員だとは思いますが…』

武田『それは何処だ。』

菅家『真っ直ぐ行って、手前から二枚目の扉がそうです。』

武田『分かった。でかしたぞ菅家。』

そう言った後、他の隊員には事務所出入口付近へ待ってもらい、俺は菅家の言われた場所に行った。

2016年12月5日 8:33

～小作事務所～作業室～

武田『失礼する！』

俺は菅家の言った場所につき、銃を構えて行った。すると確かに作業員らしき人がいた。

？『急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ…』

武田『おい、瑞穂警察のものだ。大人しく手を後ろにして立ち上がれ。』

気持ち悪いほどに同じ言葉を連呼している作業員に声をかける。すると手を後ろにせずに立ち上がり後ろを向いて来た。

武田『だから手を後ろに…!!』

そう言いかけた俺は動きを止めた。何とそこにいた作業員はゾンビになっていたのだ。

？『急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ急がなきゃ…』

武田『気持ち悪いんだよ！』
バンツ！

俺はそう言って気持ち悪いほどに同じ言葉を言うゾンビに向かって発砲した。すると、その発砲の音を聞き付けて仙林が駆け付けた。

仙林『大丈夫ですか隊長！』

武田『ああ大丈夫だ。だが、何故ゾンビが？』

殺したゾンビを見ながら呟いた。すると部屋の外から銃声が聞こえた。

バババンツ！

武田『な、何だ？何故銃声が？』

仙林『部屋の外で何か起きてまっせ。見に行きましょう。』

武田『ああ。』

不思議に成って俺と仙林はその部屋を出て、皆を待たせている事務所出入口に向かった。

2016年12月5日 8:37

く小作事務所―出入口付近く

武田『な、なんだこれは！』

俺と仙林が事務所出入口に着くと、驚くべき光景が有った。それは他の隊員がゾンビと抗戦していたのだ。

武田『大丈夫かみんな！』

西宮『だ、大丈夫や！』

仙林『何故こうなった？』

バンツ！バンツ！

菅家『仙林さんが部屋に入った後、奥からゆつくりと歩いてくる人を見掛けまして。私と西宮さん、後藤さんで声をかけたら襲い掛かってきたので撃ち殺した感じです。』

バババンツ！

後藤『そしたら複数のゾンビが迫って来たってこと。』

一応解説しよう。仙林が俺の侵入した部屋に入った後、事務所出入口の左側からノタノタ歩いてくる人を他の隊員3人は見掛けた。恐らく声をかけたのだろうがソイツはゾンビで、襲い掛かって来た為やむ無く発砲。安心した3人はホツとするが、その銃声を聞き付けて寄ってきたゾンビに遭遇し今に至ると。

バンツ！

仙林『武田隊長！どうします？』

バババンツ！バンツ！

武田『取り敢えず撤退！銃弾を無駄にしないようになー！』

隊員一同《了解！》

俺達は逃げながらゾンビと対抗。しばらく逃げているうちにこの

事業所の食堂を見付けたので、そこを目指して向かった。

2016年12月5日 8:57

く小作事務所―食堂く

ギイ：ボタン！

武田『ハア：皆無事か？』

菅家『ええ大丈夫です。』

武田『他の皆も無事なようだ。皆グテくと成ってる。』

俺は疲れながらも無事な皆を見渡した後、広い食堂に目を向ける。しばらく立ち尽くしていると後藤が話し掛けてきた。

後藤『それにしても広いですね。』

武田『ああそうだな。何か無いか調べて見る。他に出入口が有ったら封じ込めたいしな。』

後藤『では僕もお供します。』

武田『分かった。では他の隊員はここを確保してくれ。俺は後藤と共に他の出入口を確認しに行く。』

隊員一同《了解》

皆の返答を聞いた後、後藤と二人で食堂を廻った。

2016年12月5日 8:57

く小作事務所―食堂く

後藤『流石大人数の作業員を構えてるだけ有りますね。』

武田『そうだな。』

俺達は手持ちのライトで広い食堂を廻り、今3個目に成る扉を近くにあった棚を動かして封じ込めた。そして別の所に行こうとしたそ

の時だった。

ササッ

後藤『な、何だ?』

急に何かの黒い影が動いたのだ。俺はその黒い影が右に行ったのを見た。

武田『おい、右に行ったぞ! 追いかけるぞ!』

後藤『了解!』

黒い影が動いた場所へ駆け足で追いかけて奥に厨房が見え、その扉がしまつたのだ。

ギイ：ボタン!

後藤『隊長! 黒い影はこの中にいるはずですよ!』

武田『よしじゃあ二手に分かれるぞ! 中に入ったらお前は扉に留まれ!』

後藤『了解!』

俺がそう指示を出し終わり厨房に入り、そのまま厨房内を搜索し始めた。

武田『出てこい! 瑞穂警察の者だ! 大人しく出てこい!』

そう呼び掛けるが、出てこない。俺は仕方無く厨房の棚を開けて確認したり等を行った。するとまた物音がした。

ササッ!

武田『誰だ!』

俺はそう言って後ろを振り返る。すると見落としていた棚の扉が全開に開いていたのだ。

武田『チッ! めんどくさいな!』

そう愚痴を言ってその全開に開いている棚へ向かった。閉めるために棚の方へ体を向けたその時だった。何か後ろで気配を感じる。しかも徐々に俺に向かって近付いているのだ。俺は何も気にしないふりして棚の扉を閉めた。すると後ろで感じた気配が何やら刃物らしき物を持って速く近付いて来た。

? 『くたばれ!』

何者かの声と同時に刃物が降り下ろされる。しかし、俺の素早い反

射神経で近くにあつたまな板を取って後ろに回る。見事刃物はまな板に刺さり、抜けなくなっている。

？『グッ！』

武田『隙有り！』

その隙を突いた俺は何者かの腹部に気絶しない程度の力で攻撃。何者かは声を出し怯んで座り込んだ。

？『ガアッ！』

武田『さあ観念しな！さあお前は誰だ。何もんだ？』

俺は銃を向けて質問すると、何者かが喋りだした。

？『チッ！お、俺は笹平 彦継だ。ここの人質だ。』

武田『何と！お前が笹平光継の弟か！』

そう言った彦継に驚いて大きな声をあげる。俺の声で彼は少しビクツたが、余り気にしない様子だった。

武田『説明しろ。何故小作事業所はこうゾンビパークになってんだ？』

笹平『アイツのせいだ。』

武田『アイツ？』

質問した俺は少し首をかしげる。それに気付いたのか、彦継は言い直した。

笹平『アイツとは黒服の事だ。』

武田『な、何い？じゃ、じゃあこの事業所はアイツの仕業だな？』

笹平『そうだ。奴がトーウィルスをばらまいて消えた。』

武田『ば、ばらまいただと？お前は大丈夫なのか？』

俺は心配に成って大丈夫か聞いたが、笹平は落ち着いて答えた。

笹平『大丈夫だ。俺は幸い適合者だったらしい。』

武田『そうか、じゃあ俺についてきてくれ。聞きたいことがある。』

笹平『分かったぜ。』

彦継の返答を聞くと、厨房を出て後藤に話した後、皆の元へ向かった。

2016年12月5日 9:15

く小作事務所―食堂く

武田『…と言うわけだ。』

俺は彦継を連れて食堂の出入口に戻った後、訳を話した。

仙林『やはりあの黒服か。』

西宮『いつたい何人犠牲を出したら気がすむんや！この俺が見つけた次第ぶつ殺したるで！』

菅家『や、止めてください。落ち着いて。』

後藤『まあまあ落ち着け。で、これからどうする。』

武田『さあな。』

俺はそう言って彦継を見る。すると、何やらもぞもぞしていたのだ。心配に成って聞いてみた。

武田『ど、どうしたんだ？彦継。』

笹平『じ、実は俺、アイツから衝撃な事を聞いてしまったんだ。』

武田『それはなんだ？』

俺が不思議に成って問い掛けると、彦継が衝撃を語りだしたのだ。

笹平『それは…小作地区がバイオハザードに見舞われるってこと。』

第九話く発言と市街く

2016年12月5日 10:00

く小作事務所―食堂く

笹平『それは…小作地区がバイオハザードに見舞われるってこと。』

武田『え?』

俺の名は武田 清継。笹平 光継の弟…彦継を連れて他の隊員がいる食堂出入口に行き、そこでの訳を伝え、ガヤガヤし始めた所を駄目だこりやと思って彦継の方へ向いたらもじもじし始めたので聞いたら衝撃を喋ったと言う状況に至る。

西宮『な、何故いきなりなんや…』

仙林『それは本当か?』

動揺を隠せないまま聞く仙林に対し、彦継は頷いた。すると菅家明莉が酷く動揺し出す。

菅家『そんな…私の故郷が…』

後藤『落ち着け菅家。』

崩れ悲しむ菅家を後藤が近づいて背中を擦った。俺は少し悪いが、話を続けた。

武田『何故小作地区にバイオテロが?誰が惹き起こすんだ?』

笹平『惹き起こす奴はあの黒服だ。そして惹き起こす理由は奴の国家建国だそうだ。』

俺は黒服を恨みながら、日本国内で起きるバイオテロだとして危険視し、更に質問をした。

武田『何処からその情報を入手した。』

笹平『実は俺、何度も脱出を試みたんだ。その時に俺が今喋った事全ての情報が黒服とその関係者から聞こえた。』

武田『そ、そうか。じゃあ他に何か聞いてないか?』

笹平『そうだな…あとは約1年半ぐらいに実行する瑞穂警察武力占拠の計画が有るらしい。』

武田『黒服め!』

後藤『成る程な。今は東京のほぼ全域に勢力を広げる瑞穂警察を制

圧すれば、後はミズホ・アンブレラの思惑通りって訳か。』

武田『ああたぶんそうだと思う。』

仙林『何にしろ速くここを脱出して、川口刑事課長に報告するべきだな。』

武田『そうだな。』

俺はそう答えたあとに、無線機から何者かの連絡が来た。何だと思いい、無線を出てみるとそれは川口課長だった。何やら急ぎぎみでこちらに訴えている感じだった。

川口《こちら川口、川口。応答せよ。》

武田『こちら武田。一体どうしたんだ。』

そう俺が聞くと、川口課長の言葉が衝撃な展開だったのだ。

川口《速く救出をすませろ！今瑞穂警察は小作地区を封鎖し始めてるぞ！》

隊員一同《え？》

なんと、瑞穂警察が小作地区を封鎖し始めたのだ。まだ俺達が調査をしているというのに。

武田『何ですか川口課長！教えてください！』

川口《封鎖理由は小作駅周辺でバイオハザードが発生した事だ。約100人のゾンビから始まったらしい。》

仙林『マジか。』

西宮『遂に始まりやがったで、バイオハザードが！』

武田『被害はどれくらいですか？』

川口《被害はおよそ500人前後。君達が小作事業所についた瞬間に発生した感じだ。》

武田『わ、分かりました。俺達はどうすれば…』

川口《うーむ。もう時間がないから君達は小作事業所を生存者のコロニーとして構えている。そちらにBOARD teamを派遣し、署長に救出届けを出してみる。》

武田『了解、川口課長。』

川口課長との話を終わらせると無線を切り、他の隊員にこの事を伝えた。

西宮『つまり、生存者をこの事業所に集めさせる訳やな。』

武田『そうだ。分かった所で役割を決める。誰か俺と一緒に来る奴は居ないか?』

仙林『では私が行きます!』

西宮『ほなワイも行こうかのう!』

武田『後藤は?』

後藤『俺はここに残るよ。』

武田『菅家はどうか?』

菅家『私もここにいます。』

笹平『じゃあ俺も残る。』

こうして分担を決めた俺達は行動に移すことにした。

武田『よしじゃあ、西宮と仙林は俺に着いてこい。後藤と菅家と笹平は救援が来るまで事業所内のゾンビを排除しろ。そのあと、救援組には小作地区全体の生存者を探すように伝えとけ。』

隊員一同《了解!》

皆が了承したのを確認したあと、俺は西宮と仙林を連れて、ゾンビに見付から無いように小作事業所を出た。

2016年12月5日 10:45

小作駅―西口

仙林『武田隊長、ここは小作駅周辺ですよ?』

武田『ああ分かってる。』

俺達は行く道出会うゾンビを撃ち殺し、小作駅の西口にやって来た。

西宮『何か企んでやがんな?』

武田『フツ張れたか。流石だな西宮、その通りだ。』

仙林『で、何の企みですか?』

武田『小作地区でのバイオハザードを惹き起こした黒服を潰しに行く。』

西宮『理由は何や?』

武田『俺は憎き黒服を叩き潰したい、ただそれだけだ。』

俺はそう話した後、二人の納得を得て次の呼び掛けをした。

武田『疑問が解けたなら早速調査を開始するぞ!』

二人《応!》

二人が返事をした後、俺は二人を連れて小作駅周辺の散策を開始した。

2016年12月5日 11:05

〜小作駅―駅内〜

武田『此処はゾンビ以外何も異常なしか。』

俺はあの後調査する場所の振り分けをした。仙林は小作駅東口、西宮が小作駅西口で俺は駅内を調べている。

武田『次は改札内を調べてみるか。』

俺はそう言つて改札内に入り、ホームへ向かつて降りた。

武田『さて、詳しく調べるか。』

俺はホーム内のゾンビを一掃しながら調査を行ったその時。

?『良くやって来たな、ゴハン・レッドフィールド。』

武田『その声は黒服か!』

俺が根っから憎む黒服がアナウンスで登場したのだ。

?『ようこそ、私が創るテーマパークへ。』

武田『何処がテーマパークだ!サイコ野郎!』

俺はアナウンスに向かって叫んだか、黒服はそんなの気にせず淡々と喋り出した。

黒服『まあ落ち着け。今から良い情報を与えてやる。』

武田『な、何だ！』

黒服『今から小作駅東口の歩道橋へ来い。私の正体を見せようではないか。』

武田『ああ良いぜ！ちようどお前を撃ち殺したいと思った所だ！』

黒服『フツ、そう来なくちやな。ではまた東口歩道橋で会おう。』

そう言つて黒服はアナウンスの電源を切る。俺は急いで階段かけあがり、東口にある歩道橋へ向かった。

|
|
|
|
|

2016年12月5日 11:11

く小作駅―東口歩道橋く

武田『ここか？』

黒服のアナウンスを聞いて歩道橋までやつて来た。すると後ろ向きで待っている黒服を発見した。

武田『そこまでだ黒服！正体を表せ！』

黒服『フフ：』

武田『な、何故笑う！何処が可笑しい！』

黒服『まあそんなカツカすんな。歩道橋の下を除いて見い。』

俺は黒服に言われるがまま歩道橋の下を除いて見る。すると、仙林が吊るされていたのだ。

武田『せ、仙林？』

黒服『私が此処に来た際、こいつが邪魔してきてね。なので私自ら死なない程度に懲らしめてやった。』

武田『この野郎く黒服め！よくも仙林を！』

俺は怒り満ちて黒服の顔面目掛けて銃を発砲した。しかしギリギリのところを外し、フードに当たってめくれた。奴の顔も後ろへ向いていた。

黒服『バズレだったな。』

俺がそう思っているとh——彦継は長い触手で歩道橋に吊らさ
れる仙林に向かい、攻撃を繰り出そうとしている。

笹平『杉田幕府は敵！許さない…許さない!!』

武田『止めろ!』

バン!

俺は銃を奴の心臓に向けて発砲したが、攻撃を受けてもびくとめ
ずに仙林を狙う。

武田『もうだめだ、仙林よすまない!』

俺はそう言いながら絶望していると大きなエンジン音が聞こえ
たのと同時に仙林が奴の攻撃を受ける前に落ちた。よく見ると西宮が
軽トラに乗って仙林を救出していた。

西宮『武田隊長！ワイは小作事業所に戻って助けを呼んでくるわ
!』

武田『ああ頼んだぜ!』

俺はそう言った後、変貌してほぼ決まった言葉しか発しない彦継に
顔を向ける。

笹平『許さない…許さない許さない!杉田幕府殺傷!石江幕府再建
!』

武田『自分の野望の為だけに周りを巻き込むんじゃねえ!』

俺はそう言いながら、有るものを取り出した。それは仮面ライダー
システムだった。

武田『このシステムは体力消費が激しい故、まだ鍛え中なんだけ
どな。』

そう、こないだ使ったときは激しい体力消費で危うく死になりかけ
るところだったので些細な事では使わなかったのだ。

武田『だからってアイツをほっとく訳にはいかないし。よし、仕方
無い使うか!』

俺は悩んだ末、使うことにした。アイツをほっとくとこれからどう
なるかが目に見えてるから。

武田『変身!』

ベルト《レッツ討伐!今こそ立ち上がれ戦士よ!》

変身と叫んでベルトを腰に装着すると、前みたいに見えるうちに鎧が身体に付けられていき、仮面が装着されて変身が完了した。

武田『よっしゃあ！彦継、覚悟しろよ！今からお前を止めてやる！』俺はh―彦継に向かってそう宣言すると、奴に向かって走り出したのだった。果たして、俺は無事にh―彦継を倒せるので有ろうか。

| | | | |

第十話く真実と予告く

2016年12月5日 11:25

く小作駅―東口歩道橋く

武田『よっしやあ！彦継、覚悟しろよ！今からお前を止めてやる！』
俺の名は武田 清継。体力的に疲労するライダーシステムを使用
して変身した。そしてそう言った俺の声に反応したh―彦継は睨み
付けてきた。

笹平『死ぬ！裏切り者！消え失せろ！』

すると、長くなった手足で振り回すように攻撃をしてきた。

バシユン！

武田『おつと！』

俺は危険を察知して今いる場所を離れた。すると俺が居なくなっ
た場所に奴の手足がぶつかり、ヒビが入って崩れた。

ガラガラガラーン！ドドドドドッ！

武田『あ、危なかったぞ…あれを受けていたら死んでたかも…。』
ビシヤ！

武田『な、何？』

俺が建物の崩壊にそう呟くと、h―彦継はその隙については俺の腕
を掴んで振り回してきた。

笹平『裏切り者…許さない！杉田幕府残党は消え失せろ!!!』

武田『グアア！クツ!!は、離せ！』

!!!

腕を掴む奴の手を必死に成って外そうとする俺だが、離れる様子が
なくそれどころかどんどん握力が強くなっていくのだ。

バキバキ…

武田『くそ！h―ウイルスはこんなにもパワーを発揮するのか!!
ギヤァー!』

笹平『死にやがれ!!石江幕府の裏切り者!!石江幕府は必ず再建させ
る!だから死ぬ!』

大きく振り回すh―彦継は次第に“振り回す”から激しく“振り
下ろす”攻撃に変わって行くので絶体絶命な状況だった。

ドンツ！バンツ！

武田『グツ！グハア！（ど、どうしたら良いんだ？）』

俺はこの状況をどう切り抜けようかと考えていたら、手をつけていた腰の所から何らかの武器に触れた。不思議に成って手にとつて見てみるとそれは「鎌」であった。

武田『グツ！こ、これなら奴の手を切れるかもしれん！すまないな彦継!!オリヤアアア!』

シュバツ！

ドスンツ！

武田『グオオツ!』

笹平『グアアアアアア!!!』

h―彦継の手は俺によって鎌で切り落とされた。そして俺はその切り落とした手と共に落ちて大ダメージを負ったが、奴は苦しみだし、睨みながらこつちを見た。

笹平『許さない許さない許さない!!許さないぞ裏切り者!!』

武田『どうだ！化け物！つてな、何だつて?』

ブクブク：

俺がh―彦継に向かってそう言った直後、何と切り落とした奴の手が回復して元通りに成ってしまったのだ。

笹平『食らえ杉田幕府のスパイ!!死ねえええ!!!』

武田『本当の化け物か彦継!!おっと!』

シュンツ！バン！

武田『半端ねえー強さだ！うわっ!』

シュンツ！シュンツ！ババン！バン！

笹平『潰れるスパイ!!!死ね!!!』

武田『うわつと、あぶねえ！ア、アイツ、デカイ凶体の割には素早い！グハア!』

h―彦継は恨みを俺に向けてぶつけて為、攻撃をよくみて避けているが、素早すぎてなかなか避けられない。

シュンツ！シュンツ！ババン！バン！

武田『畜生、アイツの弱点が分かれば良いんだが…』

俺は奴の素早く重い攻撃から避けながら弱点を必死に探していた。
トツ！トツ！トツ！

「武田『チツ！何処だ？何処なんだ？』」

手当たり次第俺は物をh―彦継の身体に当てが余り反応がない様子だ。

笹平『何している？杉田幕府のスパイ！！許さないぞ裏切り者！！』

武田『えーいうるさいなコイツ！これでも食らいやがれ！』

俺は思いきって奴の頭に壊れた歩道橋の破片を投げ、奴の頭に当たった。するとh―彦継の頭は一部凹んだ後、再生されずに動いている。
ドコンツ！

笹平『グアアアアア！頭が痛い〜！おのれ！杉田幕府のスパイめ！』

武田『奴は他のゾンビ同様に頭が弱点か！ならば！』

さっきの出来事でh―彦継の弱点を把握した俺は足にpowerを溜め始めた。

武田『これでとどめだ！食らえ！』

ベルト音声《high speed kick》

笹平『俺はそれぐらいでは倒せんぞお！裏切り者め！』

するとh―彦継は自分の身体からt―ウィルスは放出し、自分の周り（半径20km）にいる生物をゾンビ化させて俺に襲わせた。

カラス《カアカア！》

イヌ《ガウガウっ！》

武田『チツ！面倒な事をさせやがる！』

俺は足に溜めているpowerを消さないように数十羽居るであろうゾンビカラスを銃で一匹一匹撃ち殺したり、迫ってきたゾンビネコやゾンビイヌを反対側の足で蹴り飛ばしたりと抵抗した。

カラス《カア…》

ネコ《にゃ…》

武田『邪魔してくんなよ！』

バババン！

愚痴を言いながら対抗していると、片方に溜めていたpowerが

いよいよfullpower 限界に差し掛かった。

ベルト音声《fullpower Max!!》

武田『よっしゃ、行くぞ彦継!!オリヤアアア!!!』

俺は思いつきりジャンプし、h彦継に向かってkickを繰り出す。すると彦継は右手に力を込める仕草をする。

ググググ：

笹平『くたばれ裏切り者!ウリヤアアア!!!』

h彦継の声かけと共に力を込められた右手が俺に迫る。

武田『奴め：仕方無い、これは賭けだ!!大人しく死んでろ彦継!!!』

俺はそう言った後、銃を取り出して奴の右手に向かって発砲する。そうしてもなお両者は近付いていく。

笹平『死ね!!!ウリヤアアア!!!』

武田『くたばれ!!!オリヤアアア!!!』

俺とh彦継は激しく叫びながらぶつかった。

グシャアア!!

両者のぶつかった音が鈍い音となり、周りに響いていった。

スタツ

武田『ハア：ど、どうだ!』

ズドーン!ドドド：

笹平『グアアアア!おのれ!杉田幕府のスパイめえ!!!い、石江幕

府は永遠に不滅だあ!!!』

結果は俺が勝利した。疲れきった俺は倒れるh彦継を見ながら

スタンと座り込んだ。気付くと変身は解けていた。

武田『すまない、彦継。』

俺はそう告げると、夕焼けに染まる小作駅周辺にて待機し、救助へりが来るのを待つのがあった。

|
|
|
|
|

2016年12月5日 11:55

???)

スタスタスタ：

？ 『ボス、ご報告がございます。』

ボス 『何だ、申せよ。』

？ 『は、今密偵から届いた情報によると、あの彦継が瑞穂の警官に殺れた模様です。』

ボス 『フツ、どうでも良い。奴は階級では下級戦士だったし、そもそも不良品のウィルスを使ったならよけいだ。つまり、我々の計画には何の支障も来さないのだ。』

？ 『そ、そうですか…』

ボス 『まあいい。良い実験結果なった。これを参考にまた新たなウィルスとB・O・W が開発出来るぞ。』

？ 『は、分かりました。ではその後はどうします？』

ボス 『うむ、小作地区担当している団体に連絡し、ゴハン・レッドフィールドの所に向かわせるんだ。』

？ 『ま、まさか殺すのですか？』

ボス 『いや未だだ。奴はまだ利用価値があるからな。』

？ 『了解しました。』

ボス 『他に情報はあるのか？』

？ 『は、渋谷にてボスの兄上様が計画を実行したようです。』

ボス 『そうか。兄上…で、他に情報は？』

？ 『いいえございません。』

ボス 『ではもう下がってよいぞ。』

？ 『畏まりましたF・W様。引き続き監視を行います。』

ボス 『うむ、頼んだぞ。』

？ 『では失礼いたします。』

スタスタスタ：

F・W『…これで計画が問題なく遂行される。見ておれ、我が計画を…ゴハン・レッドフィールドよ!…ハハハハ!!』

2016年12月5日 13:00

〜瑞穂警察署―オフィス〜

川口『フウ：疲れたなあ。』

俺の名は川口 孝文。刑事課長に就いているエリート警官だ。今日は瑞穂市内で起きた事件を整理していた。一応管理者だからな、確認して整理をしておかないとな。すると俺のもとにある人物が来た。ガタンツ!

? 『ハア：ハア：…け、刑事課長、お話が…』

川口『ど、どうしたんだ武田よ…』

そう、話してきた相手は先程まで小作地区の鎮圧に自然的に担っていた警官：武田 清継だったのだ。

武田『ハア：ハア：と、特別組織を作った方が良いです!』

川口『はあ? な、何言っているのだね武田。特殊部隊はミズホ・アンブレラ社が保有する…』

武田『それが使えなくなるかも…』

川口『はいい?』

俺は武田の考えている意図が分からなかった。まるで恐ろしいものを見たかのように：俺は問い掛けた。

川口『な、何故そんなに急いでいるのだね…』

武田『な、何か嫌な予感がするんです。』

川口『嫌な予感? 何だねそれは。』

武田『わ、分かりません…ですが、感じるんです…な、何かがこの

町を拠点に世界を破滅に導くと…』

俺に向かつて武田はそう言うのと、自分の部屋である刑事課長室でいきなり倒れた。

バタリ！

川口『た、武田?!』

ガタンツ！

救急隊員1『おい！ここにいたぞ！早く病院に連れていけ！』

救急隊員2『さあ大人しくして下さい。』

武田『け、刑事課長！早く、早く特別組織を創設してくださいよ！お願いします！』

ガタンツ！

川口『な、何だったんだ…』

救急隊員の面々に連れていかれて僕の部屋を去った武田を見ながら、自分は心配で立ち上がっていたのを止めて椅子に座った。

川口『…この街を……拠点に?』

俺は武田の放った言葉を思い返してヒントを得ていたが、結局分からなかった。

川口『い、一体何を考えているんだ…武田は…』

そう呟くとふと窓の向こうを見る。するとそこには夕焼け色に染まる街が移っていた。

川口『綺麗だな…まさか…!』

俺はたそがれていると、ふと思い出した。まさかまた戦国の世が舞い戻ってくるかもと…そう思った瞬間、背中がゾツとした。

川口『最近に成ってまたゾンビの事件が多いって思ってたら、そう言うことか。』

そう言いながら書類ファイル出して嘆願書を取りだし、それに用件を書き始めた。

川口『必死に伝えてくれた武田の為に、彼の要望を呑み込んで署長に結成の許可をもらおう。』

俺はそう思いながら嘆願書を書き上げ、誤字が無いかを確認して署長に提出しに行った。

川口『これで認めてくれれば良いんだが…』
そうした不安になりながら瑞穂警察署の署長室の前に立ち、少し落
ち着かせてから入っていったのだった。

| | | | | | | | | |

第二章―深刻化と捜査中 第十一話―組織と発生―

2017年1月5日 9:55

―瑞穂警察署―休憩室―

武田『ハア：何だったんだろうな。』

俺の名は武田 清継。小作地区のバイオハザードが発生してから早一ヶ月。俺は休憩室にてあの日起こった事件を珈琲飲みながら振り返っていた。すると、俺の隣に誰かが珈琲を持って来たのだ。

? 『どうしたんですか先輩、ため息なんかついて。』

武田『何だ、織金か。』

俺へ話し掛けたのは、うちの後輩警官：織金 三郎。めんどくさがりやで家に引きこもってるせいか、肥満の体型をしているゲーマーだ。

織金『眠いんすか?』

武田『違うよ馬鹿：って何のようだ。』

織金『いやくまさか先輩がため息をつくとは：俺は何かおかしいなと思って来てみただけです。何か有りました?』

武田『まあ有ったつちやあ有ったんだが：お前なら良いか。実はな……』

織金に心配されるほどの悩みは、約一ヶ月前―小作地区生物災害にさかのぼる。

≡

≡

≡

≡

2016年12月5日 12:30

―小作駅―東口歩道橋―

武田『すまない：彦継……』

あの日、戦い終えた俺はそう告げて救助に来るヘリコプターを待っていた。廻りの状態は、小作駅東口にかかっていた歩道橋が無様に壊れ、その周辺に建ってあったビルなども半分損傷してしまった。

武田『やつと終わった…』

俺がボソリと口にしたあと、その場にドタンと座った。すると何処からか細かい声が聞こえたのだ。

武田『な、何だ?』

不思議になった俺は、か細い声がする方へ向かう。するとそこには、異形な姿で瀕死寸前とながらも理性を取り戻した彦継が横渡つて居たのだ。

笹平『だ…だ…誰かあ…い…い…ないかあ…』

武田『ひ、彦継?!』

俺は駆け足で彦継の元へ行く。そして俺がついた時、彦継は何かを伝えたかっていた。

笹平『た…けだ…かあ…き…き…いて…くれえ…』

武田『む、無理するな彦継。今助けてやるからな。』

余りに苦しそうな彦継を俺は見てられず、手当てをしようとした。すると奴は俺の腕を掴んでは俺に何かを訴えてきた。

笹平『けい…さ…つしよ…ない…にう…らぎり…も…のが…居る…
…真の…く…ろまく…は…た…けだ…がよく…しつ…てい…る…
親…しみぶ…かい…じん…ぶつだ…そ…いつ…の…ガハツ!』

武田『お、おい!大丈夫か彦継!』

笹平『…』

彦継は最後の力を振り絞ったのか、理解しづらい言葉を発した後息絶えた。俺は息絶えた彦継をしばらくの間はただ見ることしか出来なかった。

武田『警察署内に裏切り者が居る?真の黒幕は俺が知っている親しみ深かった人物?』

俺は彦継の告げた言葉を思い出し、声に出して言ってみた。すると少し理解しやすくなった。

武田『そんなこと、本当にあんのか?』

少し半信半疑に成るが、裏切り者の彦継の事だ、色々知っているかもしれない。そう頭に入れて救助へりを待っていたら何か気配を感じた。俺は銃を構えてみる。

武田『(な、何だ?)』

ガチャ：

武田『(誰も居ない...)』

? 『何かを感知したか? 警部さん♪』

武田『うわっ! お、お前は誰だ!』

俺は不思議に成って振り替えたなら居なかったが、急に声のした方へ振り向くとフードの付いた黒服を来ている何者かが前に立っていたのだ。俺は即座に銃を構えて攻撃体制に入る。すると黒服は両手を小さくあげながらへらへらと喋りだした。

? 『へへ、別に殺しはしないし、手を加えたりする訳じゃないから心配すんな。』

武田『…な、なら俺に何のようだ黒服!』

? 『なあーに、そんなカツカすんな。予告だよ予告。きつと楽しい時間に成るぜ? へへ!』

武田『はあ? な、何の予告だ!』

? 『それは、2016年12月25日〜2017年1月30日までのどれかに埼玉県の飯能市にてバイオハザードが起こるぜ?』

武田『な、何い?』

? 『楽しい殺戮ショーが始まりますよ? ヒヒヒ!』

武田『果たしてそれは本当何だろうなあ! 答えろ黒服!』

? 『さあ〜てな! ヒヒヒツ! 楽しみだなあ兄弟! ハハハ!』

武田『テメー、いい加減にしろ!!』

黒服自らが新たな企みを淡々と語ったので、貴重な情報を知り得た。正直それに驚いていたが、いつまでもへらへらしている黒服に怒りが頂点へ達し、いよいよ彼を怒鳴り付けた。すると黒服は表情やトーンを変えて訴えてきた。

? 『うるせえ! 良いか? 俺達はな、無差別に殺戮を繰り返した杉田幕府に復讐をしようとしてんだよ!! お前らがいくら阻もうと諦めは

しない!!調子乗ってね〜で覚悟しろ瑞穂警察よ!!必ず潰してやる
かなあ!!』

武田『あ、ちよ、待て!』

黒服は怒り狂いながらそう話した後、俺の声を無視してその場を
去った。俺はしばらく唾然とする。

武田『これは刑事課長に知らせなきゃいかん…』

俺はそう決意し、疲れた体を癒すため、瓦礫に腰掛けたのだ。しば
らくの間静まり返った小作駅東口は、救助にやって来たヘリコプター
によって音が響き渡るのだった。

≡
≡
≡
≡
≡

2017年1月5日 10:00

〜瑞穂警察署―休憩室〜

武田『…と言うわけだ。』

俺はあの日の事件を話したあと、織金が珈琲を飲んだあとに喋つ
た。

織金『そう言うことでつきなく。』

武田『俺がため息ついた理由が分かっただろ?』

織金『はい。』

忘れることはない残酷な日を涙を我慢して話したあとは珈琲を一
口飲んだ。すると織金はまた俺に話し掛けてきた。

織金『で先輩はなにしようとしてんでつき。』

武田『なにがだ。』

織金『ほら、約4週間前に何か新組織を作るって言って動いてたん
じゃないですか。結局やって無いんようだけど…』

武田『それは組織を作ることには得意じゃないし、そもそも川口課長
が署長に進言してからなかなか許可が来ないからやっていないだけ
だ。』

織金『そうすかね。』

武田『ああ本当だよ。この俺を疑っているのか?』

織金『い、いや別にそんな…』

武田『しかし、この時本条刑事が居ればなく。本条刑事が居たら絶対早く許可が降りて結成出来ていたのにな。』

織金『そうなんすか…』

俺が疑う織金に語り、その後でそう言葉に漏らしてまた一口珈琲を飲んだ。すると、何者かがドタドタと少し急ぎぎみで俺達の居る休憩室に来た。

? 『おい武田!』

武田『な、何だ?』

俺は呼ばれたので振り替えてよく見ると出入口で止まっている川口 孝文刑事課長が居たのだ。俺は川口刑事に問い掛ける。

武田『ん? どうしたんだ?』

川口『武田…つ、遂に下りたぞ。』

織金『何がですか?』

川口『新組織を作る事だよ。』

武田『え?』

俺は一瞬自分の耳を疑った。何故なら、どんな状況であれ瑞岡 忠勝《たまおか ただかつ》署長はstarf以外に新組織を結成することを禁じたのだ。

織金『驚きです…』

武田『な、何故許可が下りたんだ?』

川口刑事に問い掛けると、彼はこう言ってきたのだ。

川口『それは多分だが、瑞穂警察の評判上げと良い成績を残しているからではないのか?』

武田『そ、そうか?』

織金『そう言えばそうですね。私がこの署に入るまではとても評判が悪かったから、それに比べれば凄く良くなっていますよ。』

川口『君は実に良い働きをしてるよ。』

織金『newstarfはあの無きラクションシティの特殊部隊・S・

T・A・R・S・と同じぐらいの存在ですもんね。』

川口『そうだな。』

織金と川口刑事が口々に挙げていった。それを聞いていた俺は少し照れながら珈琲を飲んだ。すると、川口刑事が最後にこう述べた。

川口『まあ沢山の事件を解決しているし、評判が高いから、瑞岡署長は特別に許したのだろう。』

武田『そうか。』

織金『良かったつすなあゝ先輩。』

武田『そうだな織金。これでこの先のバイオハザードに対抗できる！川口刑事課長もありがとうな態々：よし、希望の策を作るぞ！』

俺はそう言つて残りのコーヒーを飲み干したあと、片付けてからこう述べた。

武田『織金、他に仲間を此処へ連れてこい。』

織金『何人ぐらい：』

川口『取り敢えず二人か三人で良いだろう。な、武田。』

織金の問い掛けに対して川口刑事が反応してそう告げたあと、俺は頷いて織金に告げた。

武田『そうだ。まあ出来れば良いから呼んでこい。』

織金『分かりました。では：』

スタスタ：

川口『アイツで大丈夫か？』

武田『ああ大丈夫だ。奴はなんやかんや言うことはほぼ聞くからな。』

川口『それもそうだな。』

武田『さて、俺らも準備をするか。』

俺は織金に不安を持った川口刑事にそう告げたあと、二人で会議室に向かった。

武田『果たして上手くいくのかどうか：慎重にやらねばな：』
そう思いながら、組織について色々と案を練っていたのだった。

2017年1月6日 9:00

?????
)

スタスタスタ……

? 『ボス、報告がございます。』

ボス 『なんだギラン・ウオーレンよ。』

ギラン・ウオーレン (以降、G u . W a) 『只今瑞穂警察署内で不穏な動きが……』

ボス 『大丈夫だG u . W a よ。我々が警察に負けるはずない。』

G u . W a 『ですがボス。あの人物は危険ですよ?』

ボス 『ゴハン・レッドフィールドの事だろう? 大丈夫だ。彼のこと
は視野にいれてある。恐れることないぞよ。』

G u . W a 『そ、そうですか……』

ボス 『で、他に情報は無いのか?』

G u . W a 『は、最も西に有る研究所で新型ウイルスとB . O . W .
が完成したようです。』

ボス 『G u . W a よ、正式名称を知らんのか。』

G u . W a 『は、も、申し訳ございません……』

ボス 『はあ……まあ良い。で他に情報は?』

G u . W a 『いいえ、もうこれ以上有りません。』

ボス 『そうか……ではもうよい。引き続き情報収集を頼むぞ。』

G u . W a 『は、失礼いたしました。』

スタスタスタ……

ボス 『フウ…本当に大丈夫か？アイツは…』
ギイイイ…バタン…

兵士 『ど、どういたしましたボス。』

ボス 『ああ大丈夫だ。問題ない。』

兵士 『そうですか？あのだらしのない奴に任せて。』

ボス 『少なくとも君よりかは出来ると思うぞ。』

兵士 『ウツ…そ、そうですね。』

ボス 『我々の計画は不滅だ…』

| | | | | | | | | |